

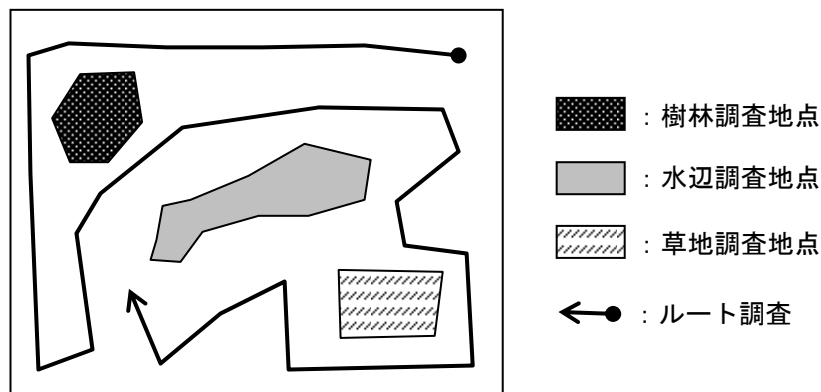
第IV章 生物実態調査

1. 植物・植生

(1) 調査方法

1) 調査対象地

第III章に示した 32 箇所 7 ルートを対象とした。ルート調査地に含まれる石神井川流域、白子川流域は、川岸より下の部分を調査し、川沿いの歩道から上は含めなかった。また、都立公園のような大規模な緑地は、公園全体としての植物相の評価ができるように調査地点以外の場所のルート調査（図IV-1-1）を行い、データの補足を行った。このルート調査は、データの補足が目的であるため、公園内の調査地点と重複する植物は一部省略している。結果は巻末の資料-3、表IV-1-3に示したように「その他」という区分にした。



図IV-1-1 植物相把握のためのルート調査イメージ

2) 調査時期

植物相調査は、平成 20 年秋期、平成 21 年春期に行い、平成 21 年夏期に補足調査を行った。また、植生を把握するためのコドラート^{※27}調査は、平成 21 年夏期に植物相の補足調査と併せて行った。調査地と調査日は表IV-1-1のとおりである。

調査終了後、平成 22 年度までに動物調査や自然観察会実施時に追加確認したのものも植物相リストに追加した。なお、都立石神井公園三宝寺池は東京都により調査が実施されているため文献調査とし、平成 20～22 年度の出現種をまとめた。

※27 コドラート：方形区ともいう。植生などを調査するときに使用する調査区。基本的な形は正方形あるが、地形や群落の広がりに応じて長方形、円形、不定形が用いられる。

表Ⅳ－１－１ 植物調査 実施日

調査地			調査実施日		
エリア	記号	調査地名	平成20年秋期	平成21年春期	平成21年夏期
Ⅰ 北町・田柄 エリア	Ⅰ①	都立光が丘公園	10月24日	4月17日 4月28日	7月14日
			10月29日		
			10月31日		
			11月13日		
	Ⅰ②	都立城北中央公園	10月15日	4月21日	7月23日
	Ⅰ③	どんぐり山憩いの森	11月11日	5月4日	7月23日
	Ⅰ④	八幡神社	10月28日	5月4日	7月22日
	Ⅰ⑤	U氏邸	10月23日	5月12日	7月31日
Ⅰ⑥	都立光が丘公園 昆虫原っぱ	10月31日	4月28日	7月14日	
Ⅰ⑦	都立城北中央公園 草地	10月15日	4月21日	7月23日	
Ⅰ⑧	高松市民農園	10月28日	5月12日	8月4日	
Ⅱ 豊玉・中村 エリア	Ⅱ①	武蔵学園	10月27日	4月27日	7月13日
	Ⅱ②	豊島園	11月6日	4月16日	7月13日
			11月13日		
	Ⅱ③	廣徳寺・区立高稲荷公園	10月15日	4月20日	7月20日
	Ⅱ④	氷川神社	10月17日	5月6日	7月20日
Ⅱ⑤	N氏邸	10月17日	5月8日	7月22日	
Ⅲ 石神井・関町 エリア	Ⅲ①	都立石神井公園	10月30日	4月24日 4月30日	7月17日
			11月6日		
			11月12日		
	Ⅲ②	区立武蔵関公園	10月29日	4月23日	7月15日
	Ⅲ③	東京カトリック神学院	10月20日	4月27日	7月15日
	Ⅲ④	天祖若宮八幡宮	10月29日	5月1日	7月21日
Ⅲ⑤	MO氏邸	10月20日	5月11日	7月27日	
Ⅲ⑥	石泉愛らんど	11月5日	5月11日	8月4日	
Ⅳ 大泉・土支田 エリア	Ⅳ①	都立大泉中央公園	10月16日	4月21日	7月23日
	Ⅳ②	稲荷山・清水山憩いの森	10月22日	4月22日	7月16日
			10月23日		
			10月25日		
	Ⅳ③	八の釜憩いの森	11月4日	4月23日	7月24日
	Ⅳ④	土支田八幡宮	10月23日	5月9日	7月16日
	Ⅳ⑤	MU氏邸	10月16日	5月7日	7月21日
	Ⅳ⑥	小作原広場	11月11日	5月13日	7月29日
	Ⅳ⑦	井頭こぶし憩いの森	11月4日	5月11日	7月28日
Ⅳ⑧	区立びくに公園	11月4日	4月23日	7月24日	
Ⅳ⑨	O氏畑	10月10日	5月13日	7月29日	
水辺	W①	石神井池	11月6日	4月30日	7月17日
	W②	三宝寺池(文献調査)	—	—	—
	W③	富士見池	10月29日	4月23日	7月15日
	W④	都立光が丘公園内BS	10月24日	4月28日	7月14日
ルート	Ｒ①	練馬駅周辺ルート	10月28日	5月13日	7月30日
	R②	城南住宅ルート	11月6日	5月12日	7月31日
			11月13日		
	R③	田柄川緑道ルート	11月11日	5月4日	7月23日
	R④	立野町ルート	11月5日	5月1日	7月28日
	R⑤	土支田・谷原ルート	10月27日	5月7日	7月30日
				5月9日	
R⑥	石神井川流域	10月21日	4月13日	7月15日	
		10月23日		7月16日	
R⑦	白子川流域	10月21日	4月15日	7月16日 7月17日	

3) 調査手法

①植物相調査

調査地を踏査し、目視による生育種の確認を行った。調査対象は、維管束植物（シダ植物、裸子植物、被子植物）とした。なお、対象とした種は、自生種^{※28}と植栽種^{※29}とした。自生種は、在来種^{※32}の他、帰化種^{※30}、逸出種^{※31}を含む。植栽種は木本の場合、生育年数が長いことから、外来種も対象とした。草本の植栽種は栽培品種を除く在来種^{※32}のみを対象とした。植栽種であるかの判断は、調査地の立地条件、栽培品種・外来種であるか否か、花壇や植栽地に列になって生育しているかなど植栽と思われる状況や文献による植栽記録などをもとに行った。自生または自生の可能性のある種は植栽されている調査地があっても在来種の場合は植栽種から除外した。例えば、在来種のシラカシは、区内では植栽が多いが、自生しているシラカシもあるため、植栽種からは除外している。

三宝寺池は、東京都により「石神井公園三宝寺池沼沢植物群落復元追跡調査」（東京都東部公園緑地事務所ほか 2009、2010、2011）が行われているため、この事業の報告書による文献調査とした。

※28 自生種：人の保護や影響を受けずに繁殖している種。野生種ともいう。

※29 植栽種：植栽された種。

※30 帰化種：意識的または無意識的に人為により移入された外来種が野生化した種。本報告書では、江戸時代末期から現代にかけて帰化したと考えられる新帰化種を対象としている。

※31 逸出種：人間の飼育下または栽培下にある生物種が、逃げ出し野生化したもの。

※32 在来種：その土地に、古来より自生している種。

②コドラー調査

調査地の代表的な植物群落組成を把握するために、コドラー調査を行った。コドラー（方形区）の大きさは樹林で10m×10m、草地で2m×2mを目安とし、地形や植生の状態により範囲を決定した。ブラウン-ブランケ（Braun-Blanquet）の植物社会学^{※33}的手法により、階層^{※34}毎の被度^{※35}と群度^{※36}を記録した。調査は、ルート、農地、水辺は除外した。

コドラー調査地点一覧を表IV-1-2に示した。コドラー調査地点は、各調査地の代表的な植物群落とした。廣徳寺はケヤキ群落が見られたため、落葉樹優勢林の調査地として選定されたが、敷地境界に植えられたケヤキが大木になっているものの、群落の幅が狭く下層植生も発達していなかったため、落葉樹優勢林のコドラー調査地点からは除外した。また、廣徳寺および都立石神井公園の針葉樹優勢林、廣徳寺およびMU氏邸の竹林、都立光が丘公園バードサンクチュアリの草地は、代表的な植物群落といえるため、コドラー調査地点として追加した。

表IV-1-2 コドラー調査地点一覧

類型	I 北町・田柄エリア	II 豊玉・中村エリア	III 石神井・関町エリア	IV 大泉・土支田エリア
落葉樹優勢林	都立光が丘公園 ・自然保全ゾーン ・BS樹林 都立城北中央公園 ・都民の森 どんぐり山憩いの森	武蔵学園 ・理科棟脇樹林 豊島園 ・庭の湯周辺林 ・石神井川沿い斜面林 廣徳寺・区立高稲荷公園 ・高稲荷公園 斜面林	都立石神井公園 ・野鳥誘致林 区立武蔵関公園 ・葦の島 東京カトリック神学院 ・雑木林	都立大泉中央公園 ・野鳥の森 稲荷山・清水山憩いの森 ・稲荷山 クヌギ群落 ・清水山 イヌシデ群落(2箇所) 八の釜憩いの森 ・コナラ群落 ・ケヤキ群落
針葉樹優勢林	八幡神社	氷川神社 〔 廣徳寺 ・ヒノキ植林 〕	天祖若宮八幡宮 〔 都立石神井公園 ・石神井城址 〕	土支田八幡宮
屋敷林	U氏邸	N氏邸	MO氏邸	MU氏邸
竹林	—	廣徳寺 竹林	—	MU氏邸 竹林
草地	都立光が丘公園 ・昆虫原つば(低・中・高茎) 〔・BS草地〕 都立城北中央公園 ・カゼクサーオオバコ群落 ・シバ群落	—	—	小作原広場(低・中茎) 井頭こぶし憩いの森 ・イヌビエ群落 ・ヨモギ群落 区立びくに公園 ・グラウンド ・法面

() 追加調査地

※33 植物社会学：植物群落または植生を研究する植物生態学の一分野。

※34 階層：群落を葉層の垂直的位置に着目して区分したもの。例えば森林では上から第一層目が高木のときは高木層といい、低くなるにつれて亜高木層、低木層、草本層、コケ層などという。

※35 被度：調査区の面積に対する、その調査区に生育する植物の垂直投影面積の割合。百分率や被度階級などで表す。

※36 群度：一定面積内の植物群落において、ある種の植物がかたまって生活するか単独で生活するかを示す尺度。

(2) 調査結果

1) 確認種数

亜種^{※37}、変種^{※38}を含め、合計 158 科 1,093 種の植物を確認した。品種^{※39}については、その種が品種のみの確認である場合を除き、種数に含めなかった。

帰化種、逸出種を含めた自生状態のものが 706 種、植栽種は 387 種であった。分類群ごとの出現状況は、表IV-1-3の様になった。

出現種のリストは、巻末の資料-3に記載した。

表IV-1-3 植物の分類群別確認種数

分類群			科数	種数 [※]	
シダ植物			18	58	
種子植物	裸子植物		8	32	
	被子植物	双子葉植物	離弁花類	82	490
			合弁花類	31	267
		単子葉植物		19	246
計			158	1,093	

[※]種数には亜種、変種を含む

2) 重要種

①確認状況

重要種を、合計 37 科 48 種確認した。植栽を除く自生と考えられる種をまとめたが、一部自生かどうか不明のものも含まれる。国 RL 記載種は 8 種、都 RL (区部) 記載種は 46 種であった。文化財保護法、種の保存法における指定種の確認は無かった。重要種一覧を表IV-1-4に示した。区部で絶滅と評価されている種を 5 種、非分布とされている種を 5 種、データ無しとされている種を 2 種確認した。区内の詳細調査によりこれらが明らかにされたことは、生物多様性保全の観点から大いに意義のあることである。

自生状態の重要種が多く生育している調査地点は、三宝寺池 (19 種)、都立石神井公園 (その他) (9 種)、清水山憩いの森 (8 種)、稲荷山憩いの森 (5 種)、白子川流域 (5 種) であった。三宝寺池は、管理作業および調査以外での人の立ち入りがなく、貴重な水生植物^{※40}の保全のために外来種や他の植物を被圧する植物を刈り取っている。また、水生植物の移植、埋土種子^{※41}発芽実験、土留め柵の設置なども行われているため、重要種の確認が最も多くなった。都立石神井公園は保護区域とされていない場所でも園路以外は柵がされて踏圧がかからず、林床^{※42}の湿り気も保たれているため、他の調査地で生育できない種が残る環境が整っている。清水山憩いの森、稲荷山憩いの森も園路以外は柵がされて踏圧がかからず、林床の下刈り^{※43}作業も定期的に行われ、昔ながらの雑木林 (落葉広葉樹林^{※44}の二次林^{※45}) の環境が残されているため、重要種が多く残されている。白子川はコンクリート護岸が多いものの、水辺に生育する重要種を確認した。また、都立石神井公園全体では、27 種もの重要種を確認し、全調査地の中で最多の確認となった。

表IV-1-5に各重要種の確認状況を記載した。

- ※37 亜種：多くの個体については同じ種と区別できるが、わずかな中間形によって連続するような場合に用いられる。はっきりと分布地域が異なるような変種を亜種とすることもある。現在、植物分類学では亜種の定義は学者によって異なり、亜種を認めない立場もある。ssp. (subspecies) と記す。
- ※38 変種：種の基準標本との形態的差異があり、地理的に分布の異なる場合変種とする。植物で用い、種名または亜種名の次に var. (varietas) と記す。
- ※39 品種：花の色の違いなどごく一部のみの違いがある個体を品種という。普通は独自の分布域をもたず、同じ種のお他個体の中に混生していることもある。f. (forma) と記す。農業や園芸利用のためにつくられた栽培品種は、学名の後に ‘ ’ (一重引用符) で囲って示す。
- ※40 水生植物：水中または水辺に生育し、植物体のすべてまたは大部分が水中にある大型の高等植物。湿地や湿原などに生育する湿生植物を含めることもある。
- ※41 埋土種子：土中に埋もれている生きた種子のこと。
- ※42 林床：森林内の地表面。
- ※43 下刈り：利用する目的のある樹木の生長を促すために、生長を妨げる草本や低木を刈り払う作業。下草刈りともいうが、農林業では下刈りという。
- ※44 落葉広葉樹林：夏期には広葉をつけ、冬には落葉する樹林のこと。夏緑広葉樹林。
- ※45 二次林：自然林の伐採後や、風水害・山火事による破壊後に再生した森林。

表Ⅳ-1-4 植物の重要種一覧（自生種※） ※一部自生種かどうか不明のものも含む

科名	種名	国 R L	都 R L (区 部)	Ⅰ 北町・田柄エリア			Ⅱ 豊玉・中村エリア				
				Ⅰ ① 都立光が丘公園			Ⅱ ① 武蔵学園	Ⅱ ② 豊島園	Ⅱ ③ 廣徳寺	Ⅱ ④ 氷川神社	
				自然 保全 ゾ ーン	B S 樹 林	そ の 他	そ の 他	庭 の 湯 周 辺 林	石 神 井 川 沿 い 斜 面 林		
アカバナ	ミスキンバイ	VU	EX								
ミクリ	ヒメミクリ	VU	DD								
ラン	キンラン	VU	VU		●						
マツバラ	マツバラ	NT	-								
ゴマノハグサ	カワヂシャ	NT									
アヤメ	カキツバタ	NT	EN								
ミクリ	ナガエミクリ	NT	NT								
ラン	タシロラン	NT		●							
オトギリソウ	ミスオトギリ		EX								
ミゾハコベ	ミゾハコベ		EX								
アカネ	フタバムグラ		EX								
アワゴケ	ミスハコベ		EX								
イワヒバ	タチクラマゴケ		CR							●	
ハナヤスリ	ナツノハナワラビ		CR						●		
ヒメシダ	ハリガネワラビ		CR								
ドクダミ	ハンゲショウ		CR								
ケシ	ヤマブキソウ		CR								
ミツガシワ	ミツガシワ		CR								
オシダ	ホソバナライシダ		EN								
メギ	イカリソウ		EN								
オシダ	アスカイノデ		VU		●			●			
カバノキ	ハンノキ		VU					●			
スイレン	コウホネ		VU								
ウマノスズクサ	ウマノスズクサ		VU								
マメ	タンキリマメ		VU			●					
ウリ	ゴキヅル		VU								
シソ	シロネ		VU								
ユリ	カタクリ		VU								
ユリ	ワニグチソウ		VU								
ヒガンバナ	キツネノカミソリ		VU								
サトイモ	ショウブ		VU								
カヤツリグサ	コマツカサススキ		VU								
ラン	ギンラン		VU								
ヤナギ	オノエヤナギ		NT								
キンボウゲ	ニリンソウ		NT								
オモダカ	ヘラオモダカ		NT								
イネ	マコモ		NT								
カヤツリグサ	ヤガミスゲ		NT								
カヤツリグサ	アオガヤツリ		NT								
カヤツリグサ	ウキヤガラ		NT								
コバノイシカグマ	イワヒメワラビ		DD					●			●
チャセンシダ	クモノスシダ		DD								
シシガシラ	コモチシダ		DD		●						
ヒメシダ	ハシゴシダ		DD						●		
カヤツリグサ	セイタカハリイ		-			●					
ウラジロ	コシダ		.						●		
イグサ	ハリコウガイゼキショウ		.								
イネ	ヌマガヤ		.								
37	48	8	46	1	3	2	1	2	3	1	1
				6				5			

Ⅲ 石神井・関町エリア					Ⅳ 大泉・土支田エリア				ルート					
Ⅲ①		Ⅲ③			Ⅲ⑤	Ⅳ①	Ⅳ②		Ⅳ④	Ⅳ⑨	R②	R⑤	R⑥	R⑦
都立石神井公園		東京カトリック神学院			MO氏邸	都立大泉中央公園	稲荷山・清水山憩いの森	清水山憩いの森	土支田八幡宮	○氏畑	城南住宅ルート	土支田・谷原ルート	石神井川流域	白子川流域
石神井城址	水辺観察園	その他	石神井池	三宝寺池(文献調査)	雑木林	その他	稲荷山憩いの森	清水山憩いの森						
													●	
				●										
	●			●		●		●						
				●								●	●	
				●								●	●	
				●										
				●					●					
				●						●				
●		●		●			●	●	●					
				●			●	●						
		●					●	●						
	●	●	●	●										
				●	●									
				●		●								
●		●		●			●	●						
			●	●	●			●						
	●	●		●										
				●	●								●	
				●									●	
		●							●					
				●										
				●										
2	3	9	5	19	1	1	1	5	8	2	1	1	3	5
		27			2			8						

【国RLおよび都RL】
EX: 絶滅
GR: 絶滅危惧ⅠA類
EN: 絶滅危惧ⅠB類
VU: 絶滅危惧Ⅱ類
NT: 準絶滅危惧
DD: 情報不足
○: ランク外
-: データ無し(都RLのみ)
・: 非分布(都RLのみ)
(詳細は第三章を参照)






表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (1/10)

<p>ミズキンバイ(アカバナ科) 国RL: 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 都RL(区部): 絶滅(EX)</p>	
	<p>確認地点: 白子川流域</p> <p>確認状況: 都RL(区部)で絶滅という評価だが、自生していた。特定外来生物のオオフサモに囲まれるように生育しているため、生育環境は良い状態ではない。</p>
<p>ヒメミクリ(ミクリ科) 国RL: 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 都RL(区部): 情報不足(DD)</p>	
	<p>確認地点: 三宝寺池(文献調査)</p> <p>確認状況: 三宝寺池の中の島に生育していた。</p> <p>※写真: 東京都東部公園緑地事務所 提供</p>
<p>キンラン(ラン科) 国RL: 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 都RL(区部): 絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点: 都立光が丘公園、都立石神井公園、MO氏邸、清水山憩いの森</p> <p>確認状況: いずれの調査地でも樹林の林床に生育していた。</p>
<p>マツバラン(マツバラン科) 国RL: 準絶滅危惧(NT) 都RL(区部): データ無し(-)</p>	
	<p>確認地点: 三宝寺池(文献調査)</p> <p>確認状況: 水位を下げた平成16年度より、池内のハンノキの根元で確認されている。生育地の水没を防ぐため、現状程度の水位の維持していくことが必要である。</p> <p>※写真: 東京都東部公園緑地事務所</p>
<p>カワヂシャ(ゴマノハグサ科) 国RL: 準絶滅危惧(NT)</p>	
	<p>確認地点: 石神井川流域、白子川流域</p> <p>確認状況: 両河川の川岸付近や浅瀬に生育していた。</p>

表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (2/10)

<p>カキツバタ(アヤメ科) 国RL: 準絶滅危惧(NT) 都RL(区部): 絶滅危惧 I B類(EN)</p>	
	<p>確認地点: 三宝寺池(文献調査) 確認状況: 三宝寺池の中の島と池畔に生育していた。</p>
<p>ナガエミクリ(ミクリ科) 国RL: 準絶滅危惧(NT) 都RL(区部): 準絶滅危惧(NT)</p>	
	<p>確認地点: 石神井川流域、白子川流域 確認状況: 両河川の浅瀬に生育していた。比較的広範囲に分布していた。</p>
<p>タシロラン(ラン科) 国RL: 準絶滅危惧(NT)</p>	
	<p>確認地点: 都立光が丘公園 確認状況: 落ち葉の多く積もった樹林の林床に生育していた。</p>
<p>ミズオトギリ(オトギリソウ科) 都RL(区部): 絶滅(EX)</p>	
	<p>確認地点: 三宝寺池(文献調査) 確認状況: 都RL(区部)で絶滅という評価であるが、三宝寺池の中の島で自生していた。 ※写真: 東京都東部公園緑地事務所 提供</p>
<p>ミゾハコベ(ミゾハコベ科) 都RL(区部): 絶滅(EX)</p>	
<p>写真無し</p>	<p>確認地点: 石神井川流域 確認状況: 調査当時、東京都RL2010年版発行前でレッドデータブック記載種ではなかった。都RL(区部)では、絶滅という評価だが、自生していた。</p>

表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (3/10)

<p>フタバムグラ(アカネ科) 都RL(区部):絶滅(EX)</p>	
	<p>確認地点: O氏畑</p> <p>確認状況: 都RL(区部)で絶滅という評価だが、畑で生育していた。</p>
<p>ミズハコベ(アワゴケ科) 都RL(区部):絶滅(EX)</p>	
	<p>確認地点: 三宝寺池(文献調査)</p> <p>確認状況: 都RL(区部)で絶滅という評価だが、三宝寺池の中の島で生育していた。</p> <p>※写真: 東京都東部公園緑地事務所 提供</p>
<p>タチクラマゴケ(イワヒバ科) 都RL(区部):絶滅危惧 I A類(CR)</p>	
	<p>確認地点: 廣徳寺、城南住宅ルート</p> <p>確認状況: 植え込みの下など湿った環境に生育していた。区内では湿り気が多い土壌環境が少ないため、生育地が限られている。造成時に土とともに移入された可能性があるが、生育環境が存在することが貴重である。</p>
<p>ナツノハナワラビ(ハナヤスリ科) 都RL(区部):絶滅危惧 I A類(CR)</p>	
	<p>確認地点: 豊島園</p> <p>確認状況: 樹林の林床に生育していた。</p>
<p>ハリガネワラビ(ヒメシダ科) 都RL(区部):絶滅危惧 I A類(CR)</p>	
	<p>確認地点: 都立石神井公園、稻荷山憩いの森、清水山憩いの森、土支田八幡宮</p> <p>確認状況: いずれの調査地でも樹林の林床に生育していた。</p>

表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (4/10)

<p>ハンゲショウ(ドクダミ科) 都RL(区部):絶滅危惧 I A類(CR)</p>	
	<p>確認地点:三宝寺池(文献調査) 確認状況:三宝寺池の中の島と池畔に生育していた。</p>
<p>ヤマブキソウ(ケシ科) 都RL(区部):絶滅危惧 I A類(CR)</p>	
	<p>確認地点:稲荷山憩いの森、清水山憩いの森 確認状況:樹林の林床に生育していた。</p>
<p>ミツガシワ(ミツガシワ科) 都RL(区部):絶滅危惧 I A類(CR)</p>	
	<p>確認地点:三宝寺池(文献調査) 確認状況:三宝寺池の池畔と中の島に生育していた。</p>
<p>ホソバナライシダ(オシダ科) 都RL(区部):絶滅危惧 I B類(EN)</p>	
	<p>確認地点:都立石神井公園 確認状況:樹林の林床に生育していた。</p>
<p>イカリソウ(メギ科) 都RL(区部):絶滅危惧 I B(EN)</p>	
	<p>確認地点:稲荷山憩いの森、清水山憩いの森 確認状況:樹林の林床に生育していた。</p>

表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (5/10)

<p>アスカイノデ(オシダ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:都立光が丘公園、豊島園、都立石神井公園</p> <p>確認状況:いずれの調査地でも樹林の林床に生育していた。</p>
<p>ハンノキ(カバノキ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:豊島園、都立石神井公園、石神井池、三宝寺池(文献調査)</p> <p>確認状況:豊島園の樹林、石神井池の周囲、三宝寺池の周囲および中の島に多く見られた。三宝寺池の調査記録は池の周囲部分を含むため、石神井公園の陸側の記録と重複している。</p>
<p>コウホネ(スイレン科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:三宝寺池(文献調査)</p> <p>確認状況:三宝寺池内と中の島に生育していた。</p>
<p>ウマノスズクサ(ウマノスズクサ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:東京カトリック神学院、都立大泉中央公園</p> <p>確認状況:調査当時、東京都RL2010年版発行前でレッドデータブック記載種ではなかった。そのため、詳細な確認状況は記録しておらず、植栽かどうか不明な確認地点のみを記載した。</p>
<p>タンキリマメ(マメ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:都立光が丘公園</p> <p>確認状況:樹林の林縁に生育していた。</p>

表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (6/10)

<p>ゴキヅル(ウリ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:石神井池、三宝寺池(文献調査) 確認状況:石神井池畔、三宝寺池の中の島で生育していた。</p>
<p>シロネ(シソ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:三宝寺池(文献調査) 確認状況:三宝寺池の中の島で生育していた。</p>
<p>カタクリ(ユリ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:稲荷山憩いの森、清水山憩いの森 確認状況:樹林の林床に群生していた。清水山憩いの森の方が群落の規模が大きい。</p>
<p>ワニグチソウ(ユリ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:都立石神井公園、稲荷山憩いの森、清水山憩いの森 確認状況:いずれの調査地でも樹林の林床に生育していた。</p>
<p>キツネノカミソリ(ヒガンバナ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:東京カトリック神学院、清水山憩いの森 確認状況:いずれの調査地でも樹林の林床に生育していた。</p>

表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (7/10)

<p>ショウブ(サトイモ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:石神井池、三宝寺池(文献調査)、白子川流域 確認状況:石神井池の池畔、三宝寺池の池畔に生育していた。</p>
<p>コマツカサスキ(カヤツリグサ科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:三宝寺池(文献調査) 確認状況:三宝寺池の中の島の平成18年度底泥撒き出し地に生育していた。</p>
<p>ギンラン(ラン科) 都RL(区部):絶滅危惧Ⅱ類(VU)</p>	
	<p>確認地点:都立石神井公園 確認状況:樹林の林床に生育していた。</p>
<p>オノエヤナギ(ヤナギ科) 都RL(区部):準絶滅危惧(NT)</p>	
	<p>確認地点:都立石神井公園、三宝寺池(文献調査) 確認状況:三宝寺池の周囲に見られた。三宝寺池の調査記録は池の周囲部分を含むため、石神井公園の陸側の記録と重複している。</p>
<p>ニリンソウ(キンポウゲ科) 都RL(区部):準絶滅危惧(NT)</p>	
	<p>確認地点:清水山憩いの森 確認状況:樹林の林床に生育していた。</p>

表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (8/10)

<p>ヘラオモダカ(オモダカ科) 都RL(区部): 準絶滅危惧 (NT)</p>	
	<p>確認地点: 三宝寺池(文献調査)</p> <p>確認状況: 三宝寺池の中の島で生育していた。</p> <p style="text-align: center;">※写真: 東京都東部公園緑地事務所 提供</p>
<p>マコモ(イネ科) 都RL(区部): 準絶滅危惧 (NT)</p>	
	<p>確認地点: 石神井池、三宝寺池(文献調査)、白子川流域</p> <p>確認状況: 石神井池の池畔、三宝寺池の中の島、中の島の保護柵内水域、白子川に生育していた。</p>
<p>ヤガミスゲ(カヤツリグサ科) 都RL(区部): 準絶滅危惧 (NT)</p>	
	<p>確認地点: 石神井池</p> <p>確認状況: 石神井池の池畔に生育していた。</p>
<p>アオガヤツリ(カヤツリグサ科) 都RL(区部): 準絶滅危惧 (NT)</p>	
	<p>確認地点: 土支田・谷原ルート</p> <p>確認状況: 畑に生育していた。</p>
<p>ウキヤガラ(カヤツリグサ科) 都RL(区部): 準絶滅危惧 (NT)</p>	
	<p>確認地点: 三宝寺池(文献調査)、白子川流域</p> <p>確認状況: 三宝寺池の中の島、白子川に生育していた。</p> <p style="text-align: center;">※写真: 東京都東部公園緑地事務所 提供</p>

表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (9/10)

イワヒメワラビ(コバノイシカグマ科) 都RL(区部):情報不足(DD)	
	確認地点: 武蔵学園、氷川神社 確認状況: 武蔵学園では、植え込みの下、氷川神社では樹林の林床に生育していた。
クモノスダ(チャセンシダ科) 都RL(区部): 情報不足(DD)	
	確認地点: 都立石神井公園、土支田八幡宮 確認状況: どちらの調査地点でも石碑の設置された岩の隙間に生育していた。石碑設置時に岩とともに運ばれた可能性がある。石神井公園のものは、石碑の設置前には生育していなかったという記録がある(東京都西部公園緑地事務所ほか 1988)。
コモチシダ(シンガシラ科) 都RL(区部): 情報不足(DD)	
	確認地点: 都立光が丘公園 確認状況: 樹林の林床に生育していた。
ハシゴシダ(ヒメシダ科) 都RL(区部): 情報不足(DD)	
	確認地点: 豊島園 確認状況: 樹林の林床に生育していた。同じ科のハリガネワラビより確認地点は少ない。
セイタカハリイ(カヤツリグサ科) 都RL(区部): データ無し(-)	
写真無し	確認地点: 都立光が丘公園 確認状況: 湿った草地に生育していた。

表Ⅳ－１－５ 植物の重要種確認状況 (10/10)

コシダ(ウラボシ科) 都RL(区部): 非分布(・)	
	確認地点: 豊島園 確認状況: 樹林の林床の斜面部に生育していた。非分布とされているが、移入の可能性の低い場所にあった。
ハリコウガイゼキショウ(イグサ科) 都RL(区部): 非分布(・)	
	確認地点: 三宝寺池(文献調査) 確認状況: 都RL(区部)では非分布とされているが、三宝寺池の中の島に生育していた。 ※写真: 東京都東部公園緑地事務所 提供
ヌマガヤ(イネ科) 都RL(区部): 非分布(・)	
	確認地点: 三宝寺池(文献調査) 確認状況: 三宝寺池内と中の島に生育していた。ハンノキの根元に限定的に分布し、生育は概ね安定していた。 ※写真: 東京都東部公園緑地事務所 提供

②重要種の保全について

重要種の確認状況から、重要種が多く生育している環境として次のような環境が抽出される。括弧内はその環境を持つ重要種の生育している調査地点例である。

- ・ 外来種や重要種を被圧する植物の除去など適切な管理のされた水生植物、湿生植物^{※46}が生育できる止水域 (三宝寺池)
- ・ 林床の湿り気を維持できる規模の樹林 (都立石神井公園樹林全体)
- ・ 踏圧の高くない林床を持つ適切な管理がされた落葉広葉樹の二次林 (稲荷山・清水山憩いの森)
- ・ 水生植物、湿生植物が生育できる河川 (白子川流域、石神井川流域)

上記のような環境を維持することが、重要種の保全に繋がる。東京都による植物群落復元追跡調査の行われている三宝寺池のように、環境を維持するための適切な管理とモニタリングを継続的に行うことが望ましい。

※46 湿生植物: 湿地や湿原など湿った環境に生育する植物。

3) 外来種

① 特定外来生物・要注意外来生物

外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）により特定外来生物と指定されている種は、4科6種であった（表Ⅳ-1-6）。オオカワヂシャは、石神井川流域および豊島園の園内を流れる石神井川沿いで確認した。オオキンケイギクは植栽されているものもあった。分布範囲の広いものとして、石神井川のオオカワヂシャ、白子川のみズヒマワリが挙げられた。


表Ⅳ-1-7に特定外来生物の確認状況をまとめた。

要注意外来生物は、トウネズミモチ、ハルジオン、セイタカアワダチソウなど36種を確認した。要注意外来生物は巻末の資料-3で確認できるようにした。

表Ⅳ-1-6 植物の特定外来生物一覧

科名	種名	Ⅱ 豊玉・中村 エリア	Ⅲ 石神井・関町 エリア		Ⅳ 大泉・土支田 エリア	ルート	
		Ⅱ ②	Ⅲ ②	Ⅲ ③	Ⅳ ⑧	R ⑥	R ⑦
		豊島園	武蔵関公園	東京カトリック神学院	区立びくに公園	石神井川流域	白子川流域
		その他	葦の島	その他	その他		
ウリ	アレチウリ		●			●	
アリノトウグサ	オオフサモ						●
ゴマノハグサ	オオカワヂシャ	●				●	
キク	オオキンケイギク	●		●			
	みズヒマワリ						●
	オオハンゴンソウ				●		
合計種数		2	1	1	1	2	2
全確認種数	4科6種						

表Ⅳ-1-7 植物の特定外来生物確認状況 (1/2)

アレチウリ(ウリ科)	
	<p>確認地点: 区立武蔵関公園、石神井川流域</p> <p>確認状況: 葦の島の日当たりのよい水辺の草地、石神井川の土手に生育していた。それぞれの調査地点での分布範囲はまだ小さいが早めの除草が望まれる。</p>

表Ⅳ－１－７ 植物の特定外来生物確認状況（2/2）

オオフサモ(アリトウグサ科)	
	<p>確認地点：白子川流域</p> <p>確認状況：白子川源流を中心に分布しており、植栽由来と考えられる。</p>
オオカワヂシャ(ゴマノハグサ科)	
	<p>確認地点：豊島園、石神井川流域</p> <p>確認状況：石神井川流域および豊島園内を流れる石神井川で生育していた。石神井川流域の調査範囲全域に分布していた。環境省RLの準絶滅危惧種である近縁種のカワヂシャの生育地を奪うとともに雑種を作り、遺伝子汚染の可能性もある。</p>
オオキンケイギク(キク科)	
	<p>確認地点：豊島園、区立武蔵関公園、東京カトリック神学院</p> <p>確認状況：植え込みの下やフェンスの隙間などに生育していた。花壇に植栽された調査地もあったが、逸出はしていなかった。</p>
ミズヒマワリ(キク科)	
	<p>確認地点：白子川流域</p> <p>確認状況：白子川流域の調査範囲ほぼ全域に分布していた。絶滅危惧種のカワヂシャ、ナガエミクリが近くに生育しており、被圧されるおそれがある。</p>
オオハンゴンソウ(キク科)	
	<p>確認地点：区立びくに公園</p> <p>確認状況：フェンス沿いの幅の狭い土の部分に生育していた。</p>

②その他の外来種

特定外来生物、要注意外来生物を含む国外外来種を 313 種、国内外来種を 266 種確認した。国外、国内の別は、巻末の資料－3 に明記した。

特定外来生物、要注意外来生物以外の国外外来種には、ヒメツルソバ、ナガバギシギシ、オランダミミナグサなどの帰化種、イチヨウ、ヒマラヤスギなどの外国原産の植栽種、パンジー、シュウカイドウ、トマトなどの逸出種が挙げられた。次項で述べたが、逸出種と帰化種の区別は難しいため、参考文献等を参考に整理した。

国内外来種には、ソテツ、スギ、ヒノキなどの植栽種、イヌカタヒバ、ホウライシダ、アシタバなどの逸出種が挙げられた。ヒムロ、ソメイヨシノ、ウンシュウミカンなどの栽培種も国内外来種に含めた。

③帰化種

外来種のうち、江戸時代末期から現代にかけて帰化したと考えられる新帰化種を帰化種とした。但し、江戸時代に帰化し江戸時代末期かどうか不明の種も帰化種に含めている。外来の植栽種が逸出し、定着して帰化種となる場合も多いため、種によっては逸出種と帰化種の区別が難しいものもある。本報告書では下記の文献を参考に帰化種、逸出種、植栽種の区別を行った。区内の調査地での生育状況も参考にした。帰化種、逸出種、植栽種の別は、巻末の資料－3 に明記した。

【帰化植物に関する参考文献等】

- ・植村ほか (2010) : 日本帰化植物写真図鑑 第 2 巻, 全国農村教育協会.
- ・岡山大学資源植物科学研究所 野生植物グループ「日本の帰化植物一覧表」
URL : http://www.rib.okayama-u.ac.jp/wild/kika_table.htm
- ・長田 (1976) : 原色日本帰化植物図鑑, 保育社.
- ・清水ほか (2001) : 日本帰化植物写真図鑑 第 1 巻, 全国農村教育協会.
- ・杉並区環境清掃部環境課 (2008) : 杉並区自然環境調査報告書 (第 5 次), 杉並区.
- ・日本生態学会編 (2002) : 外来種ハンドブック, 地人書館.
- ・港区 (2010) : 港区生物現況調査 (第 2 次) 報告書, 港区.

A. 調査地全体の帰化率

植栽種、逸出種を除く自生種 671 種のうち、帰化種は、合計 155 種であった。なお、植栽されて逸出したと見られる帰化種は除外した。調査地全体の帰化率は 23.1%であった。同じような計算方法で算出された港区の第 2 次生物現況調査の帰化率は 28.1%であった。港区は臨海部にあり、外来種の侵入の機会が多く、練馬区よりも都市化の進んでいることが帰化率が高い原因と推定される。一方、杉並区の第 5 次自然環境調査の帰化率 18.8%であった。植物の品種を集計するなど、計算方法が異なるため、単純な比較はできないが、参考値として示した。

B. 各調査地点の帰化率

各調査地点の環境ごとの帰化率を表Ⅳ－1－8 に、また全調査地点のエリアごとの帰化率を表Ⅳ－1－9 に示した。環境ごとの帰化率の平均値は、樹林地 (11.5%)、社寺林 (16.1%)、屋敷林 (11.4%) の帰化率は、全調査地の平均値 23.1% よりも低かった。水

辺（止水域）も帰化率が低く、平均値は 16.1%であった。しかし、29 ページで述べたように、自生している調査地のある種は植栽種とせず、調査地点ごとの個別の植栽種については考慮しなかったため、区内で自生する在来種の植栽が多い都立石神井公園 水辺観察園での帰化率（8.7%）は特に低くなっている。一方、農地は平均 33.3%、ルートは 19.0%の城南住宅ルート以外は帰化率が高く、平均 31.1%であった。草地は外来種の選択的除去などの管理がされている都立光が丘公園のバードサンクチュアリ草地（13.5%）と昆虫原っぱ（23.6%）では低めで、その他は 28.6~42.1%と高かった。この結果は、帰化植物が人為的な攪乱が行われる場所に多く生育することを反映している。

各調査地の環境ごとに詳細に見ると、樹林地では、高稲荷公園（斜面林のみ）、都立石神井公園の石神井城址、野鳥誘致林、都立光が丘公園のバードサンクチュアリ樹林、自然保全ゾーンで帰化率が低い。これらの樹林は保護柵がされ、立ち入り制限がされている場所である。樹林地の中でも帰化率の高かった都立城北中央公園の都民の森は、人の出入りが多く、林床が踏み固められていた。また、種数自体が少なく分母が小さいため、帰化率が高かった。

社寺林は、帰化率が 10%台とどの調査地も似かよった値となった。

屋敷林は畑や花壇のような開けた裸地を含む明るい場所が多くある調査地ほど帰化率が高かった。

草地は、人の立ち入りが制限されている都立光が丘公園のバードサンクチュアリの草地で最も帰化率が低かった。バードサンクチュアリの草地は定期的な刈り取り、外来種の除去など生物多様性に配慮した植生管理が行われていることも帰化率の低さに反映されている。人の立ち入りが一部制限され、バードサンクチュアリ同様、生物多様性に配慮した植生管理の行われている都立光が丘公園の昆虫原っぱも草地の中では帰化率が低かった。これら植生管理のされた場所は外来種を選択的除去も行われている。

農地は、除草管理がされているため、農作物以外の植物の種数と分布する面積は少ないものの、多くの帰化植物の侵入しやすい裸地ができるため、どの調査地も帰化率が 30%台と高い値となった。

水辺（止水域）は、富士見池の帰化率が他の調査地よりも高かった。富士見池は全体がコンクリート護岸で植物の種数が少なく、分母が小さいため、帰化率が高くなった。

ルートは、河川である石神井川流域、白子川流域と市街地である練馬駅周辺ルートで帰化率が高かった。河川は流れがあるため、上流から種子が運ばれる条件にあることや、土手の草刈りにより多くの帰化植物が侵入しやすい裸地を含む開けた場所があるため、帰化率が高いと言える。ルートの中で帰化植物種数が 30 種と比較的少ない城南住宅ルートは路傍に草本の生える場所がほとんどないため、帰化植物が少ないと考えられる。またルート上に向山庭園と向山谷戸緑地を含むため、種数自体も多く、帰化率が低くなった。同じく帰化植物種数が 31 種と比較的少なかった田柄川緑道ルートは、ルート沿いの花壇の除草が行われ、街路樹により木陰が作られているため、多くの帰化植物が侵入しやすい日当たりのよい裸地のある開けた場所が比較的少ないと考えられる。一方、ルート上に農地を含む立野町ルート、土支田・谷原ルート、一部空き地のあった練馬駅周辺ルートの帰化植物の種数は 40 種を超える結果となった。また、草本の生える場所の少ない練馬駅周辺ルートは全体の種数が少ないため、帰化率が河川に次いで高くなった。

表Ⅳ-1-8 環境ごとの帰化率

集計項目	樹林地																	
	I ① 都立光が丘公園		I ② 都立城北中央公園	I ③ どんぐり山憩いの森	II ① 武蔵学園		II ② 豊島園		II ③ 区立高稲荷公園		III ① 都立石神井公園		III ② 区立武蔵関公園	III ③ 東京カトリック神学院	IV ① 都立大泉中央公園	IV ② 清荷山憩いの森		IV ③ 八の金憩いの森
	自然保全ゾーン	B S 樹林	都民の森		理科棟脇樹林	庭の湯周辺林	石神井川沿い斜面林	廣徳寺	区立高稲荷公園	野鳥誘致林	石神井城址	葦の島	雑木林	野鳥の森	稲荷山憩いの森	清水山憩いの森		
合計種数※	107	138	58	102	80	148	108	169	58	93	115	87	117	117	230	206	154	
帰化植物の種数	10	9	13	16	6	17	16	25	0	4	2	13	18	19	38	25	17	
帰化率(%)	9.3	6.5	22.4	15.7	7.5	11.5	14.8	14.8	0.0	4.3	1.7	14.9	15.4	16.2	16.5	12.1	11.0	
帰化率平均値(%)	11.5																	
全体の帰化率(%)	23.2																	

集計項目	社寺林				屋敷林				草地					
	I ④ 八幡神社	II ④ 氷川神社	III ④ 天祖若宮八幡宮	IV ④ 土支田八幡宮	I ⑤ U氏邸	II ⑤ N氏邸	III ⑤ M O氏邸	IV ⑤ M U氏邸	I ① 都立光が丘公園	I ⑥ 都立光が丘公園	I ⑦ 都立城北中央公園	IV ⑥ 小作原広場	IV ⑦ 井頭こぶし憩いの森	IV ⑧ 区立びくに公園
									B S 草地	昆虫原っぱ	草地			
合計種数※	128	93	139	157	67	130	64	103	141	127	49	76	45	112
帰化植物の種数	24	11	23	27	2	15	5	24	19	30	14	26	12	47
帰化率(%)	18.8	11.8	16.5	17.2	3.0	11.5	7.8	23.3	13.5	23.6	28.6	34.2	26.7	42.0
帰化率平均値(%)	16.1				11.4				28.1					

集計項目	農地			水辺(止水域)					ルート						
	I ⑧ 高松市民農園	III ⑥ 石泉愛らんど	IV ⑨ O氏畑	W ① 石神井池	W ② 三宝寺池	W ③ 富士見池	W ④ 都立光が丘公園	III ① 都立石神井公園	R ① 練馬駅周辺ルート	R ② 城南住宅ルート	R ③ 田柄川緑道ルート	R ④ 立野町ルート	R ⑤ 土支田・谷原ルート	R ⑥ 石神井川流域	R ⑦ 白子川流域
							B S 水辺	水辺観察園							
合計種数※	83	52	57	97	111	60	32	263	114	158	117	162	154	173	125
帰化植物の種数	28	17	19	19	18	14	4	23	45	30	31	42	43	74	45
帰化率(%)	33.7	32.7	33.3	19.6	16.2	23.3	12.5	8.7	39.5	19.0	26.5	25.9	27.9	42.8	36.0
帰化率平均値(%)	33.3			16.1					31.1						

※合計種数は植栽種、逸出種を除く

表Ⅳ-1-9 エリアごとの帰化率（全調査地点）

集計項目	Ⅰ 北町・田柄エリア											Ⅱ 豊玉・中村エリア																		
	Ⅰ①			Ⅰ⑥		Ⅰ④		Ⅰ②		Ⅰ⑦		Ⅰ③		Ⅰ④		Ⅰ⑤		Ⅰ⑧		Ⅱ①		Ⅱ②			Ⅱ③		Ⅱ④	Ⅱ⑤		
	都立光が丘公園											都立城北中央公園		どんぐり山憩いの森		八幡神社		U氏邸		高松市民農園		武蔵学園		豊島園			区立高稲荷公園		水川神社	N氏邸
	自然保全ゾーン	B S 樹林	B S 草地	その他	昆虫原っぱ	B S 水辺	都民の森	その他	草地											理科棟脇樹林	その他	庭の湯周辺林	石神井川沿い斜面林	その他	廣徳寺	区立高稲荷公園				
合計種数*	107	138	141	238	127	32	58	118	49	102	128	67	83	80	159	148	108	141	169	58	93	130								
	352						158							210		254			185											
帰化植物の種類	10	9	19	35	30	4	13	31	14	16	24	2	28	6	28	17	16	31	25	0	11	15								
	59						45							36		48			25											
帰化率(%)	9.3	6.5	13.5	14.7	23.6	12.5	22.4	26.3	28.6	15.7	18.8	3.0	33.7	7.5	17.6	11.5	14.8	22.0	14.8	0.0	11.8	11.5								
	16.8						28.5							17.1		18.9			13.5											
全体の帰化率(%)	23.2																													

集計項目	Ⅲ 石神井・関町エリア															
	Ⅲ①			W①		W②		Ⅲ②		W③		Ⅲ③		Ⅲ④	Ⅲ⑤	Ⅲ⑥
	都立石神井公園			区立武蔵関公園		カトリック神学院		東京		天祖若宮八幡宮		M O氏邸	石泉愛らんど			
	野鳥誘致林	石神井城址	水辺観察園	その他	石神井池	三宝寺池	葦の島	その他	富士見池	雑木林	その他					
合計種数*	93	115	263	266	97	111	87	123	60	117	110	139	64	52		
	432						178			185						
帰化植物の種類	4	2	23	30	19	18	13	22	14	18	35	23	5	17		
	56						36			43						
帰化率(%)	4.3	1.7	8.7	11.3	19.6	16.2	14.9	17.6	23.3	15.4	31.8	16.5	7.8	32.7		
	13.0						20.2			23.2						

集計項目	Ⅳ 大泉・土支田エリア										ルート							
	Ⅳ①		Ⅳ②		Ⅳ③	Ⅳ④	Ⅳ⑤	Ⅳ⑥	Ⅳ⑦	Ⅳ⑧	Ⅳ⑨	R①	R②	R③	R④	R⑤	R⑥	R⑦
	都立大泉中央公園		清水山憩いの森		八の釜憩いの森	土支田八幡宮	M U氏邸	小作原広場	井頭こぶし憩いの森	区立びくに公園	O氏畑	練馬駅周辺ルート	城南住宅ルート	田柄川緑道ルート	立野町ルート	土支田・谷原ルート	石神井川流域	白子川流域
	野鳥の森	その他	稲荷山憩いの森	清水山憩いの森														
合計種数*	117	107	230	206	154	157	103	76	45	112	57	114	158	117	162	154	173	125
	187		282															
帰化植物の種類	19	27	38	25	17	27	24	26	12	47	19	45	30	31	42	43	74	45
	39		41															
帰化率(%)	16.2	25.2	16.5	12.1	11.0	17.2	23.3	34.2	26.7	42.0	33.3	39.5	19.0	26.5	25.9	27.9	42.8	36.0
	20.9		14.5															

※合計種数は植栽種、逸出種を除く

4) 出現頻度の高い植物

出現頻度の高い植物として、出現頻度 70%以上の種を抽出した。出現頻度は下記のように計算を行った。調査地点は、同じ公園に複数調査地点がある場合は公園ごとにまとめた。具体的には都立光が丘公園 昆虫原っぱ、都立城北中央公園 草地、石神井池、三宝寺池、富士見池、都立光が丘公園バードサンクチュアリ水辺をそれぞれの位置する公園にまとめ、26箇所7ルート、計33地点とした。

$$\text{出現頻度 (\%)} = \text{確認した地点数} / \text{全調査地点数 (33 地点)} \times 100$$

該当する植物は、55種であった(表IV-1-10)。草本類は、日陰になる路傍や人家の庭、公園などの樹林の林床などに生育する種として、ドクダミ、イヌワラビ、ツククサ、イヌタデなどが挙げられた。日当たりのよい路傍、公園の園路などに多い種は、在来種ではオニタビラコ、カタバミ、ヤブガラシ、ノゲシなど、帰化植物ではハルジオン、ヒメジョオン、ハキダメギク、セイヨウタンポポ、オランダミミナグサなどが挙げられた。木本類では、鳥糞の糞によって種子が散布されるエノキ、ヤマグワ、アカメガシワ、トウネズミモチ、ムクノキ、シュロなどが多く見られた。トウネズミモチは植栽も多い。よく植栽されている種としては、サツキ、アジサイ、ソメイヨシノ、イチョウ、シラカシなどが挙げられた。

表IV-1-10 出現頻度の高い植物(出現頻度70%以上のもの)

種名	出現頻度 (%)	種名	出現頻度 (%)
ドクダミ	100.0	アズマネザサ	81.8
オニタビラコ	100.0	スズメノカタビラ	81.8
カタバミ	97.0	ムクノキ	78.8
イヌワラビ	93.9	サツキ	78.8
ハルジオン	93.9	タチイヌノフグリ	78.8
エノキ	90.9	ハハコグサ	78.8
ヤブガラシ	90.9	ジャノヒゲ	78.8
オオバコ	90.9	ナズナ	75.8
ノゲシ	90.9	アジサイ	75.8
ケヤキ	87.9	ソメイヨシノ	75.8
ヤマグワ	87.9	ツタ	75.8
ツメクサ	87.9	カラスウリ	75.8
アカメガシワ	87.9	ヤエムグラ	75.8
ヘクソカズラ	87.9	ヨモギ	75.8
トキワハゼ	87.9	オオアレチノギク	75.8
ヒメジョオン	87.9	エノコログサ	75.8
ツククサ	87.9	シュロ	75.8
イヌタデ	84.8	イチョウ	72.7
ミドリハコベ	84.8	シラカシ	72.7
ヒナタイノコズチ	84.8	アオキ	72.7
ハキダメギク	84.8	ヤツデ	72.7
ウラジロチチヨグサ	84.8	キツタ	72.7
セイヨウタンポポ	84.8	チドメグサ	72.7
ヨウシュヤマゴボウ	81.8	オオムラサキ	72.7
オランダミミナグサ	81.8	マンリョウ	72.7
ヘビイチゴ	81.8	セイタカアワダチソウ	72.7
トウネズミモチ	81.8	ケチヂミザサ	72.7
メヒシバ	81.8		

5) 出現頻度の低い植物

重要種以外の区内で少なくなっている在来の植物を抽出するため、出現頻度の低い植物（1～3箇所での確認種）のうち、重要種、帰化種、逸出種、植栽種を除いた在来の自生種を抽出した。該当する植物は192種であった（表IV-1-11）。なお、在来種でも植栽と思われるものは除外して集計した。また、都立石神井公園水辺観察園は以前に釣り堀だった場所を整備したため、植栽種あるいは植栽種に付いた土に種子または孢子が混入していた可能性があり、区内で出現頻度が低い植物が分布していても、在来のものがどの程度あるのか判断が難しいため、集計から除外した。

出現頻度の低い植物の確認が多い調査地点は、都立石神井公園 81 種、都立光が丘公園 60 種、稲荷山・清水山憩いの森 55 種、豊島園 23 種、都立大泉中央公園 11 種、石神井川流域 11 種であった。

生育環境別に見ると、クマワラビ、ヤワラシダ、ヤマイタチシダなど、ある程度湿り気を要する樹林生のシダ植物、落葉広葉樹の二次林に特徴的なトネアザミ、シラヤマギク、ヤマユリ、サイハイランなど、草地生のススキに寄生するナンバンギセル、同じく草地生のノアザミ、トダシバ、湿生植物のオニスゲ、コアゼガヤツリ、カワラスガナなどのカヤツリグサ類などが出現頻度の低い植物として挙げられる。

以上から、出現頻度の低い植物の生育環境として、林床の湿り気を維持できる規模の樹林、踏圧の高くない林床を持つ適切な管理がされた二次林、ある程度の規模を持った踏圧の高くない低茎^{※47}から高茎^{※48}の草地、湿生植物の生えられる水辺や湿り気のある草地などの環境が抽出される。

例えば、都立石神井公園、都立光が丘公園、稲荷山・清水山憩いの森などの大規模緑地、止水域である石神井池、三宝寺池、流水域である石神井川流域がこれらの種の数少ない生育地として主に寄与しているといえる。これらの調査地では、重要種も多く確認しており、同じく重要種を多く確認した豊島園、白子川流域などと併せて、植物の生育地として重要な場所といえる。

また、かつて水田の畦などに生育していたコオニタビラコ、ノミノフスマ、カントウヨメナなどが少なくなっている。さらに、かつては路傍に普通に見られたユウガギク、ミチヤナギ、ノミノツヅリなどの出現頻度が少ないのも特徴的であり、土壌の露出した路傍が少ないことが原因と考えられる。

※47 低茎：茎の高さが低いこと。

※48 高茎：茎の高さが高いこと。

重要種の多く生育する環境と出現頻度の低い植物の生育環境をまとめると以下のような環境が抽出され、区内の植物を保全するに当たって着目すべき環境といえる。

- ・ 林床の湿り気を維持できる規模の樹林
- ・ 踏圧の低い林床を持つ適切な管理がされた落葉広葉樹の二次林
- ・ ある程度の規模を持つ踏圧の低い低茎から高茎の草地
- ・ 水生植物、湿生植物が生育できる河川
- ・ 水生植物、湿生植物の生育できる水辺や湿り気のある草地
- ・ 土壌の露出している路傍

これらの樹林、水辺、草地などの環境は適切な管理により維持されているところが多く、維持管理と植物保全をするための維持管理を同時に考えていく必要がある。

表IV-1-1 出現頻度の低い植物（出現箇所が3箇所以下のもの）

種名	出現頻度 (%)	種名	出現頻度 (%)	種名	出現頻度 (%)
クラマゴケ	3.0	コナギ	3.0	ノコンギク	6.1
ワラビ	3.0	コウガイゼキショウ	3.0	トネアザミ	6.1
コバノヒノキシダ	3.0	イボクサ	3.0	コウゾリナ	6.1
クマワラビ	3.0	トダシバ	3.0	ヤブレガサ	6.1
アイノクマワラビ	3.0	カラスムギ	3.0	シロバナタンポポ	6.1
イヌケホシダ	3.0	ノガリヤス	3.0	ヤマユリ	6.1
ヤワラシダ	3.0	ヒメノガリヤス	3.0	タチシオデ	6.1
ヒメシダ	3.0	アキメヒシバ	3.0	カエデコロ	6.1
ヘビノネゴザ	3.0	ケイヌビエ	3.0	ヤマカモジグサ	6.1
イヌガヤ	3.0	ウシノシツペイ	3.0	キツネガヤ	6.1
アカメヤナギ	3.0	ツルヨシ	3.0	ジュズダマ	6.1
メヤブマオ	3.0	イヌアワ	3.0	タイヌビエ	6.1
ミゾバ	3.0	アオウキクサ	3.0	ドジョウツナギ	6.1
ミチヤナギ	3.0	ウキクサ	3.0	サヤヌカグサ	6.1
ヤブツケイ	3.0	オニスゲ	3.0	イチゴツナギ	6.1
イヌショウマ	3.0	カサスゲ	3.0	コツブキンエノコロ	6.1
ハンショウヅル	3.0	ジュズスゲ	3.0	オオエノコロ	6.1
キツネノボタン	3.0	ミヤマカンスゲ	3.0	コガマ	6.1
マルバウツギ	3.0	ミコシガヤ	3.0	オオアオスゲ	6.1
ヤブハギ	3.0	コジュズスゲ	3.0	ヒメカンスゲ	6.1
ネコハギ	3.0	アゼスゲ	3.0	アゼナルコ	6.1
ヤブツルアズキ	3.0	モエギスゲ	3.0	シラスゲ	6.1
トウダイグサ	3.0	チャガヤツリ	3.0	カワラスゲ	6.1
ヒメミカンソウ	3.0	コアゼガヤツリ	3.0	ゴウソ	6.1
ツタウルシ	3.0	カワラスガナ	3.0	オオイトスゲ	6.1
アオハダ	3.0	ミズガヤツリ	3.0	タガネソウ	6.1
ツルマサキ	3.0	テンツキ	3.0	ヤワラスゲ	6.1
クマヤナギ	3.0	ヤマイ	3.0	タマガヤツリ	6.1
ツルグミ	3.0	イヌホタルイ	3.0	アゼガヤツリ	6.1
ナツグミ	3.0	フトイ	3.0	カンガレイ	6.1
アリアケスミレ	3.0	サイハイラン	3.0	サンカクイ	6.1
エイザンスミレ	3.0	フユノハナワラビ	6.1	タチシノブ	9.1
フモトスミレ	3.0	イヌシダ	6.1	トラノオシダ	9.1
ノジスミレ	3.0	ゲジゲジシダ	6.1	オオイタチシダ	9.1
アカバナ	3.0	モミ	6.1	ヤマイタチシダ	9.1
チョウジタデ	3.0	タチヤナギ	6.1	イタビカズラ	9.1
オカウコギ	3.0	トウゴクヤブマオ	6.1	イシミカワ	9.1
ヤマウコギ	3.0	アカソ	6.1	ノミノツツリ	9.1
ツボクサ	3.0	ノミノフスマ	6.1	コボタンヅル	9.1
ハナウド	3.0	イチリンソウ	6.1	ウツギ	9.1
イワダレソウ	3.0	カンアオイ	6.1	イヌザクラ	9.1
オドリコソウ	3.0	クサノオウ	6.1	クマイチゴ	9.1
アキノタムラソウ	3.0	ダイコンソウ	6.1	モミジイチゴ	9.1
ニガクサ	3.0	ミツバツチグリ	6.1	ヌスビトハギ	9.1
ツルニガクサ	3.0	カマツカ	6.1	カラスザンショウ	9.1
ナンバンギセル	3.0	ウワミズザクラ	6.1	ニガキ	9.1
ヤマウグイスカグラ	3.0	ニガイチゴ	6.1	メダラ	9.1
オトコエシ	3.0	ワレモコウ	6.1	オヤブヅラミ	9.1
シラヤマギク	3.0	フジカンゾウ	6.1	ハシカグサ	9.1
ガンクビソウ	3.0	ツルマメ	6.1	アカネ	9.1
ノアザミ	3.0	メドハギ	6.1	アワゴケ	9.1
ノハラアザミ	3.0	スズメノエンドウ	6.1	アゼナ	9.1
ヒヨドリバナ	3.0	カラスノゴマ	6.1	ツリガネニンジン	9.1
ヨツバヒヨドリ	3.0	ケマルバスミレ	6.1	ニガナ	9.1
ユウガギク	3.0	スズメウリ	6.1	チゴユリ	9.1
コオニタビラコ	3.0	ノダケ	6.1	ウバユリ	9.1
ヤクシソウ	3.0	ヤブニンジン	6.1	シオデ	9.1
オモダカ	3.0	ウマノミツバ	6.1	チゴザサ	9.1
アイノコイトモ	3.0	ヤブヅラミ	6.1	ヒエガエリ	9.1
ノカンゾウ	3.0	ナギナタコウジュ	6.1	キンエノコロ	9.1
ヒメヤブラン	3.0	ハッカ	6.1	ネズミノオ	9.1
ナルコユリ	3.0	ヒメジソ	6.1	ムラサキマムシグサ	9.1
ツルボ	3.0	ウグイスカグラ	6.1	ヒカゲスゲ	9.1
ヤマホトギス	3.0	シロヨメナ	6.1	シュンラン	9.1

6) 各調査地点の植物確認状況

I 北町・田柄エリア

I ① 都立光が丘公園

- ・ **確認種** : 529 種 (自然保全ゾーン 159 種、BS 樹林 184 種、BS 草地 157 種、昆虫原っぱ 142 種、BS 水辺 38 種、その他 389 種)
- ・ **重要種** : 6 種 国 RL : キンラン (VU)、タシロラン (NT)
都 RL : コモチシダ (DD)、アスカイノデ (VU)、タンキリマメ (VU)、セイタカハリイ (—)、キンラン (VU)
- ・ **帰化種** : 59 種 (自然保全ゾーン 10 種、BS 樹林 9 種、BS 草地 19 種、昆虫原っぱ 30 種、BS 水辺 4 種、その他 35 種)
- ・ **帰化率** : 16.8% (自然保全ゾーン 9.5%、BS 樹林 6.6%、BS 草地 13.6%、昆虫原っぱ 23.8%、BS 水辺 12.5%、その他 14.8%)

緑地部分には、樹林地、草地、水辺のあるバードサンクチュアリ (BS) などがある。樹林には、林床へ立ち入りできる樹林、立ち入り制限のある自然保全ゾーン、バードサンクチュアリ内の樹林がある。草地には、芝生広場以外に草本をある程度繁茂させながら管理を行っている、こども虫あそび広場、昆虫原っぱ、バードサンクチュアリ内の草地などがある。水辺には、コンクリート護岸の観賞池、自然を模したエコトーンのある護岸のバードサンクチュアリ内の人工池、水生昆虫誘致池などがある。

都立光が丘公園内には、屋敷森と呼ばれる住居跡があり、庭も含め保全されている。庭の跡地なので、植栽と考えられる種が多いが、在来種が多く生育している場所である。

◆自然保全ゾーン

都立光が丘公園北東部の平坦地に位置する。柵を設けて、公園利用者の立ち入りを制限し、植生の保全を図っている区域である。

自然保全ゾーンの主な植生は、エノキやオオシマザクラなどの植栽林である。高木層は 20m 程度で、もともと公園施工時に植栽したと考えられるエノキやオオシマザクラが優占^{※49}している。亜高木層は 14m 程度で、ミズキ、シラカシなども出現している。下刈りの頻度が低いため、下層植生が繁茂している。低木層は 2.5m 程度で植被率^{※50}は 70% と高く、アズマネザサやシュロが多く生育しているほか、タブノキ、アラカシ、アオキなどの常緑樹が入り込み、常緑広葉樹林への遷移が進んでいる。草本層は 0.5m 程度で低木層で常緑の種が繁茂して、林床に届く光が少ないため、林床が暗く湿った状態で保たれ、ドクダミ、ミズヒキなどのやや湿性を好む種も見られる。また、腐植^{※51}の堆積が進んでいることから、腐生植物^{※52}のタシロランも出現している。

都立光が丘公園では、下草を強度に刈り込んでいる樹林地が大部分を占めるため、自然保全ゾーンの繁茂したアズマネザサが動物の隠れ場になり、動物の生息地としての役割も期待できる。その反面、アズマネザサが繁茂しすぎると、草本類を被圧して、植物相の多様性が低下する可能性もある。

◆バードサンクチュアリ樹林

都立光が丘公園南西部のバードサンクチュアリの池周辺の盛土上に位置する。野鳥保護のためにフェンスで囲み、公園利用者を制限している区域である。

バードサンクチュアリ樹林の植生は、シラカシ、マテバシイ、ムクノキなどの植栽林である。コドラート調査地点では、高木層は15m程度でムクノキが優占しており、亜高木層は8m程度で、ミズキ、コナラ、ムクノキなどの武蔵野台地の二次林を構成する樹木が見られた。低木層は3.5m程度で、ヤツデ、シュロなど、暖地生の常緑樹が出現している。コドラート調査地は下刈りの頻度が低く、草本層は0.8m程度で、アズマネザサの植被率が90%程度と高く、その他の種は、マンリョウ、アマチャヅルなどがわずかに見られる程度であった。樹林全体で見ると、下刈りの頻度が場所によって異なり、下層植生の草丈も異なるため、環境の多様性を高めている。

この区域は、フェンスで人の侵入を禁止し、バードサンクチュアリ内に樹林地、草地、水辺が揃っていることから、野鳥や動物の生息地としての役割も担っている。調査中にハトが食べられた跡が見られ、猛禽類によるものと考えられる。

◆バードサンクチュアリ草地

バードサンクチュアリの池周辺の傾斜地に位置している。野鳥の保護のためにフェンスで囲み、公園利用者を制限している。

バードサンクチュアリ草地の植生は、低茎から高茎の草地である。コドラート調査地点では、オギが優占し、アズマネザサ、セイタカアワダチソウなど高茎草本が多く生育していた。草地に出現するメハジキ、ウマノスズクサ、スズメウリ、アキノエノコログサなどが混在している。草刈りの頻度やタイミングによって、草地の草丈や優占種に違いが見られる。オギがパッチ状^{※53}に刈り残され、草丈に多様性を持たせ、動物の生息地としても多様性を保つように管理がされている。

この草地は、バードサンクチュアリ内の樹林地と水辺に、植生のエコトーンを形成し、バードサンクチュアリ全体の生態系の多様性を高めている。水辺から樹林地にかけて、湿性を好む種から乾性を好む種までが生育することができ、樹林や水辺だけでなく草地も必要とする昆虫類や鳥類の生息地としても機能している。

◆昆虫原っぱ（I⑥）

バードサンクチュアリ南側に隣接する草地に位置している。バッタ類やチョウ類の生息地となるように草刈りの頻度を変えて低茎から高茎草地として管理されている。

昆虫原っぱの植生は、草刈りの頻度により異なっている。草刈の頻度が、低い場所から高い場所に向かって、優占種は、草丈2mのススキ群落、草丈0.5mのカモジグサ群落、草丈0.3mオオバコ・カゼクサ群落と移行している。ススキ群落では、ススキが高被度で優占するほか、ヤブガラシ、エビヅルなどのつる植物も見られる。カモジグサ群落では、カモジグサ、アキノエノコログサなどのイネ科植物が多く見られる。オオバコ・カゼクサ群落では、草丈が低く、公園利用者の出入りも多いことから、オオバコ、カゼクサなどの踏跡雑草が見られる。

この区域は、昆虫の隠れ場や、吸蜜の場として機能している。特に、高茎のススキ群落は、昆虫の隠れ場となっているほか、吸蜜できる花が咲くヤブガラシ、セイタカアワダチソウ、マツヨイグサなどの植物も混生しており、昆虫の餌場としても機能していると考えられる。

◆バードサンクチュアリ水辺 (W④)

バードサンクチュアリ内に位置する。野鳥の保護のためにフェンスで囲み、公園利用者を制限している区域である。

主な植生は、スイレンの浮葉植物^{※54}群落、高茎の抽水植物^{※55}群落である。ヒメガマ群落、ヨシ群落、ショウブ群落、フトイ群落などの抽水植物群落が見られ、優占種が、場所により異なっている。

この水辺は、水辺から草地、樹林へ移行するエコトーンとなっていることで、生物が生息するバードサンクチュアリの機能を高めている。池に開放水域、水深の深い場所、浮葉植物群落、抽水植物群落があることで水鳥の隠れ場、餌場といった生息地としても機能している。バードサンクチュアリの池は、公園内に整備された池であり環境として安定しているが、放置すると遷移して一面がヨシ群落になって生態系としては、単調になる可能性もある。

※49 優占：ある群落で特に多く、その群落を量的に代表していること。

※50 植被率：調査区の面積に対する、その調査区に生育する植物の垂直投影面積の割合。百分率で表す。
被度のように種ごとでなく、階層ごとに表す。

※51 腐植：土壌中に含まれる有機物のこと。狭義には、植物遺体の分解過程で生ずるフルボ酸、腐植酸、フミン酸などからなる複雑な組成を持つ黒褐色の物質で土壌を肥沃にするといわれている。

※52 腐生植物：光合成による有機物合成で自活することができず、菌類と共生することで有機物を得ている植物。菌類と共生して腐植などから栄養を得ていると考えられていたため、腐生とされたが、実際には腐植を分解する菌類以外の菌との共生も見られる。菌従属栄養植物。

※53 パッチ状：斑状。まとまりのあるものが点在している状態。

※54 浮葉植物：根が水底に固着し、水面に浮く葉（浮葉）を展開する生活形をとる植物。

※55 抽水植物：根が水底に固着し、植物体の一部が水面を突き抜けて空気中に出る生活形をとる植物。

I ② 都立城北中央公園

- ・ 確認種：238 種（都民の森 75 種、草地 56 種、その他 187 種）
- ・ 重要種：なし
- ・ 帰化種：45 種（都民の森 13 種、草地 14 種、その他 31 種）
- ・ 帰化率：28.5%（都民の森 22.4%、草地 29.2%、その他 26.5%）

緑地部分には、樹林地、草地などがある。樹林は林床への立ち入り制限はない。

◆都民の森

都民の森は、都立城北中央公園南部の平坦部に位置する。公園利用者に開放されており、人の出入りがしやすいようにされている。

主な植生は、ケヤキやクスノキの植栽林である。高木層は 15m 程度で、ケヤキやクスノキの植栽密度が低いために、樹冠^{※56}が大きく広がり植被率は 90%であった。亜高木層は 7m 程度で植被率は 20%であった。低木層は、ほとんど見られず、1m 程度のヤブツバキ、クスノキなどがわずかに植栽されているのみである。林床に光は差し込むが、人の往来が多いために、土壌が踏み固められて、草本層には、オオバコ、スズメノカタビラなどの踏跡雑草がわずかに見られる程度である。

都民の森は、人の利用を中心となっている樹林である。高木層、亜高木層は、よく生長しているが、視界をさえぎる低木や、藪をつくる草本は、ほとんど見られない。もともと、高頻度で間伐^{※57}や下刈りをしてきたと考えられるが、現在では、多くの人を利用するため、土壌が踏み固められて、踏跡雑草しか入り込めない状態になっている。

◆都立城北中央公園 草地（I ⑦）

調査対象とした草地は、城北中央公園の南西部の平坦地に位置している。公園利用者が自由に利用できる芝生として維持するように高頻度で草刈りをして管理されている。シバを養生している場所については、フェンスで囲まれていた。

草地の植生は、植栽された草丈 0.3m 程度のシバ群落が大部分を占めていた。シバのほかに、シロツメクサ、メヒシバなどが出現していた。シバが踏みつけによって、弱ってしまった部分には、カゼクサ、オオバコなどの踏跡雑草が優占している群落も見られた。

※56 樹冠：樹木の枝や葉が茂っている部分のこと。なお森林では、枝葉の茂っている上部の層を林冠という。

※57 間伐：利用する目的のある樹木の生長を促すために、樹木を間引く作業。

I ③ どんぐり山憩いの森

- ・確認種：144 種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：16 種
- ・帰化率：15.7%

どんぐり山憩いの森は、樹林がロープ柵で仕切られ来園者は通路のみを歩く様になっている。西側の樹林は、クリの植栽林で、高木層はクリ、亜高木層、低木層は無く、草刈りが頻繁にされているためか、草本層の植被率は低い。東側の樹林の高木層は 16m 程度でイヌシデ、クヌギ、ムクノキ、ケヤキなどが見られた。亜高木層は 10m 程度でシラカシなどが見られ、低木層は 2m 程度でアオキなどが見られた。林床は暗く、草本層には、アズマネザサ、ケチヂミザサなどが見られたが、種数は少なかった。この樹林は、二次林だった場所に遷移過程でシラカシが入り込み、常緑広葉樹林化している状態といえる。現在はロープ柵で立ち入りを制限されているものの柵内の林床も踏み固められており、全体に林床の植物は少なかった。

I ④ 八幡神社

- ・確認種：166 種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：24 種
- ・帰化率：18.8%

八幡神社は、平坦地に樹木が植栽されている。境内は開放され一般の参拝者が自由に入出りできる。

主な植生は、ヒノキ植栽林である。高木層に樹高 18m 程度のヒノキが優占しており、ケヤキ、シラカシなども生育している。参拝者が歩きやすいように間伐、下刈りなどの管理が強度に行われており、亜高木層、低木層は、樹木が見られない。草本層も植被率 5% 程度であり、ドクダミなどが見られるほか、オオバコ、ハルジオン、カタバミなどがわずかに見られる程度である。

八幡神社は、境内にあたり、参拝者が利用できるように管理がよくされている。高木層のヒノキやシラカシはよく生長しているが、間伐や下草刈りが強度に行われているため、亜高木層、低木層には、樹木が見られない。草本層も踏み固めの影響が大きくわずかに見られる程度である。

区内では少ないウラシマソウが見られた。常緑広葉樹林帯の低地の湿った林に見られるウラシマソウの生育地として神社に残された樹林が寄与していると考えられる。しかし、八幡神社でも個体数は少ない状態である。

I ⑤ U氏邸

- ・確認種：105種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：2種
- ・帰化率：3.0%

U氏邸は、敷地境界にケヤキが多く植えられ、樹齢400年とも言われる大径木が多い。敷地内の樹林の高木層は26m程度で高木層の高さとしては、調査地の中で最も高くなった。高木層はムクノキ、シラカシが優占し、亜高木層は15m程度でシラカシなどが見られた。低木層は樹林内の一角で発達しており、5m程度でトウネズミモチが優占していた。低木層の発達した場所の草本層は高さ0.6m程度で、キヅタ、アズマネザサが見られた。低木層の発達していない場所では、草本層にケチヂミザサ、ジャノヒゲなどが見られた。草本層に帰化植物のノハカタカラクサが増え始めていたが、草刈り管理が定期的に行われているため、優占はしていなかった。

I ⑧ 高松市民農園

- ・確認種：99種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：28種
- ・帰化率：33.7%

高松市民農園は、比較的粗放管理で、敷地の一角に草丈が高くなった場所も見られ、メヒシバ、アキノエノコログサなどの群落も見られた。畑で草花を育てる人もおり、チョウ類など吸蜜にくる昆虫が見られた。

畑は除草されているため、草本の被度は少ないが、ニワホコリ、スベリヒユなどが比較的多く見られ、区内の他の場所ではあまり見られなかったアゼナが比較的多く確認された。また、栽培されていたカミツレが逸出し、群落を作っていた。

II 豊玉・中村エリア

II① 武蔵学園 (7.1ha)

- ・確認種：311種 (理科棟脇 104種、その他 245種)
- ・重要種：1種 都 RL：イワヒメワラビ (DD)
- ・帰化種：36種 (理科棟脇樹林 6種、その他 28種)
- ・帰化率：17.1% (理科棟脇樹林 7.6%、その他 17.7%)

武蔵学園には、敷地境界に植栽されたケヤキの巨木が多く、ねりまの名木百選に選定されているものもある。構内には、濯（すすぎ）川と呼ばれる小川が流れている。濯川は千川上水の分水の一部が復元されたもので、現在は水を循環させている。

◆理科棟脇樹林

理科棟脇樹林は、武蔵学園南東部に位置している。学園の敷地の端にあり、管理がゆるやかなため、林の階層構造が見られる。

高木層には、樹高 15m 程度のミズキが優占し、スダジイも多く見られた。亜高木層では、高さ 6m 程度のトウネズミモチが優占しているほか、アオキ、シラカシなどが出現している。低木層は、高さ 1.5m 程度であり、アオキ、ヤツデなどの常緑樹やアズマネザサが目立っている。草本層は、部分的に人の往来によって踏み固められた部分もあることから、植被率 10% 程度と低く、ムクノキの実生^{※58}やナガバジャノヒゲなどが見られた。校舎の陰で暗くなる部分では、ドクダミなども見られた。

この樹林は、もともと植栽された樹木と植栽後に入り込んできた樹木が混在している。高木層では、植栽されたと考えられるスダジイ、ミズキなどが見られたが、低木層～亜高木層にかけては、もともと植栽されていたトウネズミモチ、カキノキの間に、陽樹^{※59}のアカメガシワ、ムクノキや、常緑広葉樹林の林床に見られるアオキ、ヒサカキなどが入り込んでいると考えられる。

※58 実生：種子から発芽して生じた植物。

※59 陽樹：よく日が当たる場所でないと生長できない樹木。

II② 豊島園 (30ha)

- ・ **確認種** : 363 種 (庭の湯周辺林 224 種、石神井川沿い斜面林 125 種、その他 198 種)
- ・ **重要種** : 5 種 都 RL : ナツノハナワラビ (CR)、コシダ (・)、アスカイノデ (VU)、ハシゴシダ (DD)、ハンノキ (VU)
- ・ **帰化種** : 48 種 (庭の湯周辺林 17 種、石神井川沿い斜面林 16 種、その他 31 種)
- ・ **帰化率** : 18.9% (庭の湯周辺林 11.5%、石神井川沿い斜面林 15.0%、その他 22.3%)
- ・ **特定外来生物** : 2 種 オオカワヂシャ、オオキンケイギク

豊島園は、練馬城跡が明治後期に豊島公園となり、大正 15 年 9 月に一部開園した。現在は遊園地として利用されている。ある程度まとまった樹林があり、園内を石神井川が流れている。

◆豊島園 庭の湯周辺林

庭の湯は、豊島園南東部に位置している。温泉施設の景観をよくする庭園として整備され、もともと社寺林だった林の間に池があり、池の周辺は観賞用の植物が植栽されている。

庭の湯周辺林の高木層は 14m 程度でクスノキ、ハンノキ、イヌシデが生育し、亜高木層は 8m 程度でマテバシイ、キンモクセイ、ヒサカキなどが生育していた。ハンノキは、水辺に生育する樹木であり、庭の湯が社寺林として利用されていた頃に植栽されたと考えられる。低木層は 3.5m 程度で植被率は、10%程度と低く、ヒサカキ、ヒメコウゾ、ヤマグワなどの木本が出現していた。草本層は 0.5m 程度でケチヂミザサが優占していたほか、ヤブミョウガ、ジャノヒゲなど樹林に見られる草本と、ヨウシュヤマゴボウ、ヒメスミレなど草地に見られる草本が混在していた。また、オニマタタビ、ヘクソカズラといったつる植物も出現していた。

◆石神井川沿い斜面林

石神井川沿いの斜面林は、豊島園内を流れる石神井川沿いの南側の斜面に位置している。斜面部のため、園地として利用されず、樹林が残されている。

石神井川沿い斜面林の高木層には、樹高 15m 程度のスダジイが優占しているほか、イイギリも見られた。亜高木層は 6m 程度で、スダジイ、モチノキなどが見られた。低木層は 1.5m 程度で、アズマネザサが優占しており、アオキ、シュロ、スダジイなどの常緑樹が出現していた。上層をスダジイやアズマネザサが覆っているため、草本層の植被率 10%程度と低く、ベニシダ、ナガバジャノヒゲ、ヤツデなどがわずかに生育していた。

この区域は、面積は狭いが、利用しにくい斜面部にあるため、伐採されずに残ったスダジイ群落が見られる。スダジイ群落は、関東地方では、自然林を構成する樹林であり、自然植生が残存したものと考えられる。自然植生が残存している場所は区内では少なく、調査地の中では三宝寺池と本調査地点のみであり、貴重な植生であるといえる。

II③ 廣徳寺・区立高稲荷公園

- | | |
|------------|------------------------|
| ・確認種：304種 | (廣徳寺 281種、区立高稲荷公園 73種) |
| ・重要種：1種 | 都 RL：タチクラマゴケ (CR) |
| ・帰化種：25種 | (廣徳寺 25種、区立高稲荷公園なし) |
| ・帰化率：13.5% | (廣徳寺 15.0%、区立高稲荷公園 0%) |

廣徳寺と区立高稲荷公園は樹林として一体と見なしたが、タイプの違う樹林が隣接しているため、両方を調査地とした。区立高稲荷公園は、イヌシデの斜面林のみを調査対象とした。

◆廣徳寺

廣徳寺は、石神井川沿いの河岸段丘の平坦地にあり、墓地の周辺に樹木が植栽されている。参拝者が利用しやすいように、よく管理されている。

主な植生は、モウソウチクやヒノキの植林である。敷地境界にケヤキが列状に植林された一角もあった。モウソウチク植栽林では、高木層に、樹高 10m 程度のモウソウチクが優占している。間伐、下草刈りなど、管理が徹底されており、亜高木層、低木層には、植物が見られず、見通しがよくされている。草本層は、高さ 0.4m 程度であり、ドクダミ、ツユクサ、ヤブミョウガなどのやや湿性を好む種が目立っていた。ヒノキ植栽林では、高木層に樹高 16m 程度のヒノキが優占していた。ヒノキ植栽林は、廣徳寺の縁にあるため、周辺からの視界を遮断するため、管理の程度を低くしている。そのため、亜高木層、低木層は、植被率 20～30% 程度に維持され、ヒサカキ、ヤブツバキ、モチノキなどの常緑広葉樹が目立っていた。草本層は、林内が暗く、歩道になって踏み固めの影響も見られることから、植被率 3% 程度と、ほとんど植物が見られず、シュロの実生がわずかに見られる程度であった。ヒノキ植栽林は、廣徳寺の境内にあたり、景観や安全の観点から管理がよくされている。管理により、樹林の生育環境が維持されている反面、出現種数が少ない傾向が見られた。

◆区立高稲荷公園

区立高稲荷公園の樹林は、公園南部の斜面部に位置している。フェンスを設置して、樹林が保護されている。

主な植生は、イヌシデ群落である。高木層に樹高 15m 程度のイヌシデが高被度で優占しており、亜高木層は 6m 程度で、ムクノキ、ミズキがわずかに見られる程度であった。低木層は 0.5m 程度で、アオキ、シュロ、トウネズミモチなどの常緑樹や、ムクノキ、ムラサキシキブなどの落葉樹が出現していた。樹林はフェンスで囲まれているが、土壌の踏み固めが見られた。そのため、草本層は萌芽力の強いアズマネザサを除くと、イヌワラビ、ヤブコウジなどがわずかに見られる程度であった。

この樹林は、石神井川沿いの斜面林が二次林として残った場所である。現在は、フェンスで囲まれて、保護されている。神社と公園にはさまれた人の集まる場所で、土壌の踏み固めがあることから、以前は、人の利用があったことが推定される。踏み固めの影響から、植物種の出現種数は限られるが、石神井川沿いに哺乳類や鳥類が移動する拠点の樹林としての機能は期待できる。

II④ 氷川神社

- ・確認種：149種
- ・重要種：1種 都RL：イワヒメワラビ（DD）
- ・帰化種：11種
- ・帰化率：11.8%

氷川神社は、平坦地に樹木が植栽されている。境内は開放され一般の参拝者が自由に出入りできる。

主な植生は、シラカシ群落である。サワラ、ヒノキ、スギの植栽林もあるが、規模は小さい。シラカシ群落の高木層は12m程度でシラカシが高被度で優占しているほか、ミズキ、ソメイヨシノ、ヒノキの植栽木が見られた。亜高木層は8m程度で、植栽されたヒサカキが生長し高被度で優占しているほか、タブノキ、シロダモなどの常緑の陰樹^{※60}も入りこんでいた。低木層は2m程度で、シュロ、アオキ、ネズモチなどの常緑樹が目立っていた。草本層は、植被率10%程度であり、シュロ、クマザサ、アズマネザサなどが見られた。

氷川神社の樹林は、植栽されたシラカシやソメイヨシノが生長してできたと考えられる。植栽地であるが、潜在自然植生の構成種であるシラカシが生育し、常緑広葉樹林へと遷移が進み、林内にシロダモ、タブノキなども入り込んでいる。

公園ではあまり見られないコスミレ、スミレが通路沿いや木の根元に生育していた。いずれも踏み固められた土壤に生育していた。

II⑤ N氏邸

- ・確認種：191種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：15種
- ・帰化率：11.5%

N氏邸は、個人宅の庭の平坦地に樹木が植栽されている。住人が庭園の景観を楽しむように、剪定、落ち葉かきなどの管理がされている。

主な植生は、ムクロジ植栽林である。高木層には、樹高12m程度のムクロジが優占していたほか、ケヤキ、コブシ、シロダモなどが植栽されていた。亜高木層は8m程度で、ヒサカキ、ウメ、モッコクなど、様々な観賞用の樹木が植栽されていた。庭園内を歩けるように管理してあるため、草本層の植被率は、5%程度と低く、花壇のようにして植栽されたハランを除くと、わずかに芽を出した実生の植物が見られる程度であった。

公園ではあまり見られないコスミレが軒下の土壤が踏み固められた場所に生育していた。雨だれで窪んだところに列になって生育していた。

N氏邸の樹林は、庭木が植えられた場所である。自然状態の樹林とは異なるが、花や実が目立つ樹種が植えられており、鳥類や昆虫類の餌場としての役割は担っていると考えられる。

※60 陰樹：耐陰性が強く日陰や暗い林床でも生長できる樹木。

Ⅲ 石神井・関町エリア

Ⅲ① 都立石神井公園 (20.1ha)

- ・ **確認種** : 614 種 (野鳥誘致林 142 種、石神井城址 157 種、水辺観察園 343 種、石神井池 120 種、三宝寺池 122 種、その他 379 種)
- ・ **重要種** : 27 種 国 RL : マツバラシ (NT)、カキツバタ (NT)、ヒメミクリ (VU)、キンラン (VU)
都 RL : マツバラシ (―)、クモノスシダ (DD)、ホソバナライシダ (EN)、アスカイノデ (VU)、ハリガネワラビ (CR)、オノエヤナギ (NT)、ハンノキ (VU)、コウホネ (VU)、ハンゲシヨウ (CR)、ミズオトギリ (EX)、ゴキヅル (VU)、ミツガシワ (CR)、ミズハコベ (EX)、シロネ (VU)、ヘラオモダカ (NT)、ワニグチソウ (VU)、カキツバタ (EN)、ハリコウガイゼキシヨウ (・)、ヌマガヤ (・)、マコモ (NT)、シヨウブ (VU)、ヒメミクリ (DD)、ヤガミスゲ (NT)、コマツカサススキ (VU)、ウキヤガラ (NT)、ギンラン (VU)、キンラン (VU、)
- ・ **帰化種** : 56 種 (野鳥誘致林 4 種、石神井城址 2 種、水辺観察園 23 種、石神井池 19 種、三宝寺池 18 種、その他 30 種)
- ・ **帰化率** : 13.0% (野鳥誘致林 4.4%、石神井城址 1.8%、水辺観察園 8.7%、石神井池 19.6%、三宝寺池 16.2%、その他 11.4%)

石神井公園は、道路を挟んで石神井池、三宝寺池があり、それを取り囲むように樹林がある。樹林は園路以外は柵により立ち入り制限が行われている。

◆野鳥誘致林

野鳥誘致林は、石神井公園西側の平坦地に位置する。野鳥を誘致する目的で、フェンスで囲まれ保護された樹林である。

主な植生は、コナラ群落である。高木層に樹高 15m 程度のコナラが高被度で優占しているほか、ムクノキ、イイギリなどの落葉樹が生育している。亜高木層は 10m 程度で、ヒサカキ、ヒノキが出現していた。低木層は 4m 程度で、イヌツゲ、ユズリハ、ネズミモチなどの常緑樹が目立っていた。フェンスで人の出入りを制限しているため、草本層の植被率は、60%程度と高く、ジャノヒゲ、ヤブランなどの草本類、ハウチャクソウ、ウバユリなどのやや湿性を好む種、キヅタ、サネカズラなどのつる植物も出現していた。

野鳥誘致林は、ヒノキ、イイギリなどの植栽種とコナラ、ムクノキなどの二次林の構成種が混在している。元々、公園の植栽地だった場所を、野鳥誘致林として、管理の頻度を低くしたため、二次林の構成種が増えていると考えられる。

◆石神井城址

石神井城址は、石神井公園三宝寺南側の微高地に位置している。城跡に残った樹林をフェンスで囲い公園利用者が進入できないようにされている。

主な植生は、植栽されたヒノキとシラカシが混在した樹林であった。高木層は 20m 程度で

ヒノキが優占し、シラカシも混在していた。亜高木層は 10m 程度で、シラカシ、ムクノキ、イロハモミジなどが生育していた。低木層は高さ 4m 程度であり、アオキ、シュロ、ヒサカキなどの常緑樹が目立っていた。草本層は、草丈 0.7m 程度でアズマネザサが優占しているほか、ヤブミョウガ、ナガバジャノヒゲなどが生育していた。

石神井城址には、城の周辺の植栽された樹林が残っている。もともと人為的に植栽された樹林ではあるが、植栽されたヒノキやシラカシが 20m 程度の大木に生長して、風格をもっている。城址としての文化的な価値のほか、動物の生息地としての役割も期待できる。高い樹林は、野鳥の生息地になり、林内は、タヌキなどの動物の隠れ場になると考えられる。

◆水辺観察園

水辺観察園は、石神井公園三宝寺池の北東側にある湿地で、維持管理がされている。釣り堀だった場所に造成されたものである。

水辺観察園は、様々な湿生植物が生育している。湿地生の植物が生育できるように、水位や草刈りの頻度を変えて管理されており、水位の高い部分では、アサザ、ヒツジグサなどの浮葉植物、水位の低い部分では、ミツガシワ、コウホネなどの抽水植物、湿った部分では、ハンゲショウ、ヌマトラノオ、チョウジソウなどの湿地生の種、その周辺では、フジバカマ、などの草地生の種といった様々な種が植栽されている。湿生植物が生育しやすい環境をつくっていることで、ミズニラなど、新たな湿生植物も入りこんでいる。

外部から持ち込まれた植栽種がほとんどであるが、ハンノキは三宝寺池周辺からの飛来種子由来と考えられる。また、カキツバタは三宝寺池の中の島から移植されたものである。

この区域は、人為的に管理して植物種の多様性を高めている。一般に湿地の植生は、水の流れが安定すると、高茎のヨシやヤナギ類が繁茂する傾向がある。水辺観察園も放置するとヨシが繁茂すると考えられる。管理することで、近年、生育地が失われて少なくなっている湿生植物の保存の場として機能している。

◆石神井池 (W①)

石神井池は、石神井公園の東側にある池である。ボート乗り場があり、公園利用者がボートに乗ることができる。

池の西端と東側の木道沿いを中心にヨシやマコモなどの抽水植物群落が成立している。また、池の周辺には、公園整備の際に残されたと思われる湿地生のハンノキの高木が点在している。

石神井池は、公園の西側にある三宝寺池と比較すると、人の利用に重点がおかれている。ボートの利用のため、池の水面の植物はほとんどなく、水際に抽水植物群落が帯状に見られる程度である。

◆三宝寺池 (W②)

調査がすでに行われているため、文献調査とした。文献は、「石神井公園三宝寺池植物群落復元追跡調査報告書 平成 21 年 2 月」、「同 平成 22 年 2 月」、「同 平成 23 年 2 月」に記載された平成 20～22 年度の調査データをまとめた。なお、陸側から三宝寺池まわりを調査した際に確認した種（メリケンガヤツリ）を 1 種追加した。

三宝寺池沼沢植物群落は、文化財保護法により国指定の天然記念物として指定されている。三宝寺池の外周部にはハンノキオニスゲ群集、三宝寺池の中の島にはカサスゲ群集があり、都内でも数少ない自然植生が残存している。

カキツバタ、コウホネ、ミツガシワなどの群落が見られるほか、重要種を 19 種確認し、全調査地点の中で最多である。他の調査地点で確認していないマツバラシ、ヘラオモダカ、ヒメミクリなどの重要種は 13 種にものぼった。

Ⅲ② 区立武蔵関公園

- ・ **確認種**：261 種 （葦の島 107 種、富士見池 65 種、その他 201 種）
- ・ **重要種**：なし
- ・ **帰化種**：36 種 （葦の島 13 種、富士見池 14 種、その他 22 種）
- ・ **帰化率**：20.2% （葦の島 14.9%、富士見池 23.3%、その他 17.6%）
- ・ **特定外来生物**：2 種 アレチウリ、オオキンケイギク

区立武蔵関公園は、富士見池のまわりに樹林地が整備され、池を一周できる園路が整備されている。富士見池には、北端に松の島、南端に葦の島という 2 つの島がある。富士見池を囲む樹林地は幅が狭く、園路を中心としているため踏圧が高く、草本層は発達していない。よって、階層構造の発達した葦の島をコドラート調査地とした。

◆区立武蔵関公園 葦の島

葦の島は、区立武蔵関公園の南西部に位置している。公園内の富士見池の中にあるため、人が進入できない状況になっている。

葦の島の主な植生は、メタセコイア植栽林である。高木層に樹高 25m 程度のメタセコイアが植栽されている。亜高木層は、6m 程度でタブノキ、ヒサカキなどの常緑広葉樹が目立っていた。低木層は 3m 程度で植被率は 70% 程度と高く、シュロ、アオキ、シロダモなどの常緑広葉樹が目立っていた。草本層は 0.3m 程度で、スイカズラ、サネカズラなどのつる植物や、ドクダミ、オオバジャノヒゲなどの草本類が見られた。

葦の島では、植栽されたメタセコイアが大きく生長してランドマークとなるような樹林を形成している。池があるため、人が島に進入できず、林内で遷移が進んでいる。落葉針葉樹のメタセコイアの下層が、落葉広葉樹の二次林と似た環境になっているため、落葉広葉樹の下層で生長する陰樹であるタブノキなどが入りこんでいる。

◆富士見池 (W③)

富士見池は、区立武蔵関公園にある池で、市民がボートを利用できるようになっている。富士見池の水際は、コンクリート護岸がされており、水際の植生はほとんど見られない。葦の島にヨシ群落が見られる程度であった。護岸の隙間にはホウライシダ、ヤブソテツ、オニヤブソテツ、イノモトソウなどが見られた。

Ⅲ③ 東京カトリック神学院

- ・ 確認種：267種（雑木林種 148種、その他 173種）
- ・ 重要種：2種 都 RL：ウマノスズクサ（VU）、キツネノカミソリ（VU）
- ・ 帰化種：43種（雑木林 18種、その他 34種）
- ・ 帰化率：23.2%（雑木林 15.4%、その他 31.8%）
- ・ 特定外来生物：1種 オオキンケイギク

東京カトリック神学院は、石神井川の南側に面し、クヌギの雑木林、ヒマラヤスギなどの針葉樹を中心とした植栽地、シバ草地、花壇、畑、グラウンドなどがある。

◆雑木林

雑木林は、東京カトリック神学院の西部の平坦部～斜面部に位置している。東京カトリック神学院が建設される前にあった樹林が残されたと考えられる。

主な植生は、クヌギ群落である。高木層には、樹高 20m程度もあるクヌギが優占しており、イヌシデ、イロハモミジなども生育していた。亜高木層は 8m 程度でシラカシ、エゴノキなどが出現していた。低木層は 3m 程度で、アオキ、シュロ、シロダモなどの常緑樹が生育していた。草本層は 0.5m 程度で、アズマネザサが優占しており、ハエドクソウ、ケチヂミザサなどの草本類が生育していた。

この雑木林は、面積は広くないが、下刈りが行われており、里山^{※61}の二次林の環境が維持されている。学院内で人の侵入も少なく、踏み固めの影響も限られていた。クヌギから樹液が出ていたため、調査時にも、樹液に集まる生きたカブトムシや鳥に食べられたカブトムシの死骸も確認し、動物の生息地、餌場として利用されていると推測される。

※61 里山：薪や炭を生産する薪炭林、堆肥をつくるための落葉落枝、草などを集めるための農用林など集落に隣接した人が生活のために利用する林のこと。周辺の集落、農地、ため池、採草地なども含む場合もある。

Ⅲ④ 天祖若宮八幡宮

- ・確認種：183種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：23種
- ・帰化率：16.5%

天祖若宮八幡宮は、平坦地に樹木が植栽されている。ロープを張って、参拝者が立ち入れる場所とを区分けしている。

主な植生は、ヒノキ植栽林が大部分を占めている。高木層には、樹高20m程度のヒノキが高被度で優占している。神社の境内にあり、下刈りが定期的に行われているため、亜高木層は見られず、低木層にも樹高5m程度のヒサカキがわずかに残される程度である。草本層は0.5m程度で、ドクダミが優占しているほか、ホウチャクソウ、ヒトリシズカ、ハエドクソウといった種が見られた。

ヒノキ植林地は、下刈りなどの管理がおこなわれ、人の進入が規制されている。そのため、土壌が踏み固められずに、軟らかい状態で保たれていた。同じヒノキ林でも、八幡神社では、人の出入りが自由で踏み固めの影響が強いため、林床には、ドクダミなどがわずかに見られる程度であった。天祖若宮八幡宮のヒノキ植林地は、進入規制があるため土壌がやわらかく、亜高木層を欠き低木層の植被率が低いことで林床がある程度明るく、落葉広葉樹の二次林に出現するようなホウチャクソウ、ハエドクソウなどやや湿性を好む種が生育できる環境として維持されていた。このような林床の植物が多く生育できる環境は区内では貴重である。

帰化植物であるヒメヒオウギズイセンが林縁部を中心に分布を広げていた。在来の林床植物が被圧されないように選択的に抜き取りが必要と考えられる。

Ⅲ⑤ MO氏邸

- ・確認種：105種
- ・重要種：1種 国RL：キンラン (VU)
都RL：キンラン (VU)
- ・帰化種：5種
- ・帰化率：7.8%

MO氏邸の高木層は23m程度のシラカシが多く、東側の敷地境界にはケヤキが一行植栽され、大木になっていた。10m程度の亜高木層もシラカシが優占し、ネズミモチ、シュロなども多く見られた。低木層は2.5m程度で、ヒサカシが多く、アオキなども見られた。草本層は0.8m程度で高木層由来のシラカシの実生が多く、アズマネザサ、シュロなども見られた。

敷地境界に植栽されたケヤキの根元にキンランを一株確認したが、林床が暗く、近くに剪定枝などが積み、落ち葉かきがされていないため、生育には不適と考えられる。キンランが存在しているということは、かつては、里山の二次林のように林床が明るく保たれ、落ち葉かきがされていたと考えられる。建物と敷地境界の狭い場所にあるため、明るい林にするのは難しいが、ケヤキの枝落としや積まれた剪定枝の撤去、落ち葉かきなどの管理を行えば、キンランの埋土種子が発芽する可能性もある。

Ⅲ⑥ 石泉愛らんど

- ・確認種：54種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：17種
- ・帰化率：32.7%

屋敷林と隣接した畑だが、植物調査は畑のみを対象とした。畑は除草管理がされているため、作物以外の草本は少ないが、ハキダメギク、ゴウシュウアリタソウ、スベリヒユなどを確認した。

畑という場所柄、土や肥料、種子と一緒に草本の種が運び込まれる機会が多いと考えられるが、本来南西諸島から沖縄に生育するヤンバルミチヤナギを確認した。

IV 大泉・土支田エリア

IV① 都立大泉中央公園

- ・ 確認種：273 種（野鳥の森 151 種、その他 172 種）
- ・ 重要種： 1 種 都 RL：ウマノスズクサ（VU）
- ・ 帰化種： 39 種（野鳥の森 19 種、その他 27 種）
- ・ 帰化率：20.9%（野鳥の森 16.7%、その他 25.5%）

園内には、野鳥の森、樹木の植栽地、シバ草地、チョウの食草^{※62}を植えたチョウの里、野球場、競技場などがある。

園内でアリアケスミレを確認しており、調査地の中では唯一の確認地点となったが、植栽の可能性が高い。シバ草地の日当たりの良い法面などにカントウタンポポの群落が見られた。

◆野鳥の森

大泉中央公園の南西部の平坦地に位置している。樹林の中に遊歩道があるが、歩道以外も比較的踏圧が高い。林内にカントウタンポポの群落があり、ロープ柵で立ち入りが制限されていた。

主な植生は、オオシマザクラの植栽林である。高木層は、樹高 12m 程度であり、オオシマザクラが優占しているほか、ミズキ、ウワミズザクラ、ケヤキなどの落葉広葉樹が多く生育している。林内は、間伐や下刈りが行われており、亜高木層、低木層は、植被率 10～15% 程度と低く保たれていた。亜高木層にはヤブツバキ、アラカシなど、低木層にはアオキ、ヒサカキなどが生育していた。草本層は、ケチヂミザサが優占し、ヤブラン、ジャノヒゲなどの草本類が見られるほか、オオバコなどの踏跡雑草も出現している。

林床の一角に区内では少ないアオイスミレの群落が見られたが、草刈り頻度が非常に高く、群落が縮小傾向にあった。

※62 食草：食植性の昆虫が食べる植物。例えば、モンシロチョウはアブラナ科植物を食べるなど、特定の食草を持つ種がいる。

IV② 稲荷山憩いの森・清水山憩いの森

- | | |
|------------|---|
| ・確認種：366種 | (稲荷山憩いの森 289種、清水山憩いの森 254種) |
| ・重要種：8種 | 国 RL：キンラン (VU)
都 RL：ハリガネワラビ (CR)、ニリンソウ (NT)、イカリソウ (EN)、ヤマブキソウ (CR)、カタクリ (VU)、ワニグチソウ (VU)、キツネノカミソリ (VU)、キンラン (VU) |
| ・帰化種：41種 | (稲荷山憩いの森 38種、清水山憩いの森 25種) |
| ・帰化率：14.5% | (稲荷山憩いの森 16.5%、清水山憩いの森 12.3%) |

2つの憩いの森は隣接しており、白子川沿いの斜面部に残された樹林に位置している。カタクリの自生地として有名である。清水山憩いの森の湧水は東京の名湧水 57 選に選定されている。

◆稲荷山憩いの森

稲荷山憩いの森は、利用者が通行する場所がロープで分けられている。

主な植生は、クヌギ群落などの二次林である。スギ、ヒノキの植栽林、シラカシ群落、ムクノキ群落、アカマツ群落などもあった。クヌギ林の高木層には、16m程度のクヌギが優占しており、亜高木層は 10m 程度で、ミズキ、ケヤキ、シラカシ、コブシなどが生育していた。低木層は 1.5m 程度で、下刈りのときに残されたクサギなどがわずかに見られる程度である。草本層には、アズマネザサが優占するが、下刈りが行われており、草丈が 0.4m 程度で抑えられていた。アズマネザサのほかに、タチツボスミレ、ドクダミ、ハエドクソウ、ワニグチソウなどの草本が見られた。

稲荷山憩いの森は、里山の二次林の状態に維持されている。ロープで人の進入を規制することで、土壌の踏み固めを避けている。また、下刈りを行うことで、林床にアズマネザサが繁茂することを防いでおり、林床に光が差し込むため、様々な草本類が生育できるようになり、植物相の多様性を高めている。清水山憩いの森よりも規模は小さいが、カタクリの群生地がある。

◆清水山憩いの森

清水山憩いの森は、稲荷山憩いの森と同様に、利用者が通行する場がロープで制限されている。

主な植生は、イヌシデ群落である。高木層には、16～20m程度のイヌシデが優占しており、亜高木層には 8m 程度のイヌシデが生育していた。低木層は 3m 程度で、下刈りの際に、選択して残された樹木のみが生育しているため、植被率は 10%以下で、サワフタギ、イヌツゲ、エゴノキなどがわずかに残っていた。草本層は、アズマネザサが優占しているが、下刈りを行っているため、草丈が 0.5m以下で抑えられている。アズマネザサのほかに、タチツボスミレ、ハエドクソウ、コチヂミザサなどの草本が見られた。また、ヤマブキソウ、キンランなどの重要種も確認した。

清水山憩いの森は、良好な里山の二次林の状態に維持されている。ロープによる進入制限や下刈りの管理により、柴刈りが定期的に行われていた里山の二次林の環境に近い状態をつくりだしている。清水山憩いの森は、カタクリが群生する場所としても知られており、植物相の多様性が高い環境といえる。

IV③ 八の釜憩いの森

- ・確認種：213種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：17種
- ・帰化率：11.0%

八の釜憩いの森は、水路沿いの斜面に残った樹林である。遊歩道が設置され樹林内に入れるようになっている。

主な植生は、コナラやケヤキが優占する二次林である。北側では、高木層にコナラが優占する植分^{*63}があり、南側では、高木層にケヤキが優占する植分が見られ、間伐や下刈りなどの管理は、どちらの植分でも同様におこなわれており、亜高木層～草本層には、大きな違いは見られない。亜高木層では、コナラ、ケヤキのほか、ミズキ、エゴノキなどの落葉樹が見られた。低木層の植被率は40%程度であり、ヤマブキが優占しているほか、シュロ、ムラサキシキブ、トウネズミモチなどが見られた。草本層は、アズマネザサが高被度で優占しているが、下刈りなどの管理が行われており、タチツボスミレ、ヤブランなどの草本、イヌワラビ、ベニシダなどのシダ植物、ツタ、ヘクソカズラなどのつる植物も出現していた。

樹林内は、柵で遊歩道が設置されているが、水路が子どもの遊び場になっており、林内にも立ち入ることから、踏み固めの影響が見られる。

※63 植分：種組成や群落構造がほぼ均質な群落のまとまりのことを指す。

IV④ 土支田八幡宮

- ・ 確認種 : 182 種
- ・ 重要種 : 2 種 都 RL : クモノスシダ (DD)、ハリガネワラビ (CR)
- ・ 帰化種 : 27 種
- ・ 帰化率 : 17.2%

土支田八幡宮は、ゆるやかな傾斜地にあり、樹木が植栽されている。境内は開放され、一般の人も利用できる場所である。

主な植生は、スギ植栽林である。境内は、全般的に利用者による踏み固めの影響が見られた。高木層の被度が高い林床の暗い林と間伐により、スギの植栽密度が低いため、林内が明るく、様々な草本類が生育する林が見られた。コドラート調査では後者を対象とした。

コドラート調査地点は、境内の端にあり、周辺の道路から段差がある入りにくい場所のため、踏み固めの影響が限られている林であった。高木層に樹高 15m 程度のスギが植栽されており、間伐により植被率は 70% 程度である。亜高木層、低木層も間伐されており、植被率は 10% に限られており、亜高木層にシラカシ、ヒサカキ、低木層にアオキが見られる程度である。高木層～低木層が間伐されて、林床に光が入りやすいため、草本層の植被率は、80% と高い。草本層は、下刈りが行われているため、草丈は 0.2m 程度と低く、ケチヂミザサ、ハエドクソウ、ドクダミなどのやや湿性を好む種、ジャノヒゲ、ナガバジャノヒゲ、アズマネザサなど常緑性の植物、イヌワラビ、ヒメワラビなどのシダ植物などが生育していた。

他には、八幡神社と同様に区内では少ないウラシマソウが見られた。しかし、ここでも個体数は少ない状態である。また、樹林の一角に区内で少ないヒメウズの 4m×5m ほどの大きな群落が見られた。

IV⑤ MU 氏邸

- ・ 確認種 : 136 種
- ・ 重要種 : なし
- ・ 帰化種 : 24 種
- ・ 帰化率 : 23.3%

MU 氏邸は、個人宅の平坦地に植栽された屋敷林である。MU 氏邸は古くから続く農家であり、この屋敷林は、防風のために植栽されたと考えられる。

主な植生は、ケヤキ群落、モウソウチク植栽林である。モウソウチク植栽林では、高木層に 16m 程度のモウソウチクが優占しており、その間から、生長したシラカシが抜きでていた。亜高木層は欠いていた。管理の程度が低く、折れ竹も残っており、林内が暗く、低木層には、1.5m 程度のシュロ、アオキ、シロダモなどの常緑の陰樹が見られた。草本層は、シラカシの実生などがわずかに見られる程度である。

一方、ケヤキ群落では、高木層に樹高 16m 程度のケヤキが優占しているほか、シラカシが見られた。亜高木層は 12m 程度で、ヒサカキが優占しており、シュロ、モッコクなどの常緑樹が目立っていた。低木層は 2m 程度でシュロが優占していた。草本層は、植被率 10% 程度であり、アズマネザサが優占していた。

MU 氏邸の樹林は、農家の代表的な屋敷林といえる。この屋敷林は、農地の中にあり、動物が移動するための踏石ビオトープとして、飛行する鳥類が休んだり、哺乳類が隠れたりする役

割も期待できる。

IV⑥ 小作原広場

- ・確認種：78種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：26種
- ・帰化率：34.2%

小作原広場は、草地の広がった広場で、カイツカイブキ、エノキなどが敷地境界に植栽されている。草地は、パッチ状に刈り残して管理されており、刈り残された部分には、カゼクサ、チカラシバが優占していた。低く刈られた場所は、オヒシバ、メヒシバが優占し、オオバコ、シロツメクサが混在していた。全体に踏圧が高いため、踏跡雑草が多い。

植栽の可能性もあるが、草地の植物として近年あまり見られなくなっているカントウヨメナを確認した。

IV⑦ 井頭こぶし憩いの森

- ・確認種：45種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：12種
- ・帰化率：26.7%

井頭こぶし憩いの森は、井頭憩いの森に隣接した屋敷跡地である。中央には庭木として植えられた樹木が残っている。周辺部は植栽木が植えられているが、まだ葉が茂っていないため、草地が広がっている。そのため、区内では少なくなった草地の調査地として選定し、草地部分の調査を行った。周辺部は柵で囲われ、ヨモギ、ハルジオンなどが優占していた。中央部の草地にはイヌビエ、メヒシバ、オヒシバなどが優占していた。

IV⑧ 区立びくに公園

- ・確認種：120種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：47種
- ・帰化率：42.0%
- ・特定外来生物：1種　オオハンゴンソウ

区立びくに公園は、平坦地を、野球やサッカーのグラウンドとして利用できるように維持された草地である。そのため、定期的に草刈りなどの管理が行われている。

主な植生は、グラウンド周囲の法面のシロツメクサ群落とグラウンドのギョウギシバ群落であった。法面では、シロツメクサが優占しているほか、オオバコ、シマスズメノヒエ、イヌビエなどの草本も出現していた。グラウンドはギョウギシバ群落であるものの、水が溜まりやすい、わずかな窪地にコゴメガヤツリが優占し、タマガヤツリ、イヌビエなどの湿生の種が多く生育していた。

この区域は、人の利用が前提で維持されている草地であるが、野球の外野にあたる部分など

は、湿った場所や踏み固めの影響の少ない場所もあり、生育する植物種に変化が見られ、草党性昆虫類の生息の場となっている。

IV⑨ ○氏畑

- ・ 確認種： 68 種
- ・ 重要種： 1 種 都 RL：フタバムグラ (EX)
- ・ 帰化種： 19 種
- ・ 帰化率： 33.3%

畑は除草管理がされているため、作物以外の草本は少ないが、スベリヒユ、ニワホコリ、ゴウシュウアリタソウなどを確認した。

東京都 RL (区部) で絶滅と評価されているフタバムグラを確認した。

ルート調査

R① 練馬駅周辺ルート

- ・確認種：166種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：45種
- ・帰化率：39.5%

舗装されているところがほとんどで、植物の生えている場所は、駅前のフェンスで囲まれた空き地、街路樹の植栽部、街路沿いの植え込み、コンクリートの隙間などであった。街路樹は、プラタナス、セイヨウトチノキ、サツキなどであった。街路樹のない道路もあり、植被率の低いルートであった。駅前ロータリーの花壇に要注意外来生物のワルナスビが繁茂していた。

R② 城南住宅ルート

- ・確認種：273種
- ・重要種：1種 都 RL：タチク라마ゴケ (CR)
- ・帰化種：30種
- ・帰化率：19.0%

住宅の庭木以外の植物は、アスファルトの隙間、空き地、向山庭園、向山ヶ谷戸緑地などに生育していた。庭園や緑地が含まれることで、ルート調査で2番目に確認種数が多かった。公園ではあまり見られないコスミレ、スマレ、ヒメスマレが路傍のコンクリートの隙間などに生育していた。

重要種は、タチク라마ゴケを確認した。

R③ 田柄川緑道ルート

- ・確認種：190種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：31種
- ・帰化率：26.5%

植栽された植物が中心だが、植え込みの面積が大きく確保されている緑道のため、自生している種も確認した。自生種は、日当たりのよい路傍にはユウゲショウ、ツボミオオバコなどの帰化植物が見られ、日陰にはドクダミ、イヌワラビなどが見られた。高木の根元の舗装していない部分には樹林の林縁などに生育するケチヂミザサが見られたが、踏圧が高いため、点在する程度であった。

R④ 立野町ルート

- ・確認種：284 種
- ・重要種：なし
- ・帰化種：42 種
- ・帰化率：25.9%

ルート上に住宅、農地、千川上水、区立立野公園など、多様な環境があるため、ルート調査では最も確認種数が多かった。公園ではあまり見られないコスミレ、スマレが路傍のコンクリートの隙間などに生育していた。

R⑤ 土支田・谷原ルート

- ・確認種：240 種
- ・重要種：1 種 都 RL：アオガヤツリ (NT)
- ・帰化種：43 種
- ・帰化率：27.9%

ルート上には土支田農業公園、屋敷林、農地など、多様な環境があるため、ルート調査で3番目に確認種数が多かった。公園ではあまり見られないコスミレ、ヒメスマレが路傍のコンクリートの隙間などに生育していた。

R⑥ 石神井川流域

- ・確認種：192 種
- ・重要種：3 種 国 RL：ナガエミクリ (NT)
都 RL：ミゾハコベ (EX)、カワヂシャ (NT)、ナガエミクリ (NT)
- ・帰化種：74 種
- ・帰化率：42.8%
- ・特定外来生物：2 種 アレチウリ、オオカワヂシャ

茜歩道橋から平成みあい橋までの範囲を調査ルートとした。平成 20 年秋期は調査対象区間を調査することができたが、平成 21 年初頭より半年間、長光寺橋から上流に向けて豊島橋までの河床掘削工事が始まったため、平成 21 年春期は茜歩道橋から山下橋を調査範囲とした。平成 21 年夏期は、長光寺橋から豊島橋の工事は終了していたが、憩い橋と豊島橋間で栈橋を架けるための川の拡張工事が行われていた。よって、豊島橋から下流は非常に植物が少ない状態であった。

調査対象地はコンクリート三面張り護岸で、土砂の溜まった部分に植物が生育している状態であった。しかし、茜歩道橋付近は川幅を広くとって、両岸に草地が残されていた。

特定外来生物であるオオカワヂシャは、調査対象範囲内全域に断続的に繁茂していた。特定外来生物のアレチウリも確認した。重要種は、3 種確認した。重要種のカワヂシャと雑種を作り、遺伝子汚染を引き起こすおそれのある特定外来生物のオオカワヂシャが繁茂しているため、オオカワヂシャの駆除作業などの対策が望まれる。後述する白子川では、カワヂシャのみでオオカワヂシャの確認はなかった。イネ科ドジョウツナギ属の一種を確認したが、結実が確認できなかったため、種の同定に至らなかった。重要種のムツオレグサ (都 VU) である可能性も

ある。

R⑦ 白子川流域

- ・ 確認種：141 種
- ・ 重要種：5 種 国 RL：ミズキンバイ (VU)、カワヂシャ (NT)、ナガエミクリ (NT)
都 RL：ミズキンバイ (EX)、マコモ (NT)、ナガエミクリ (NT)、
ウキヤガラ (NT)
- ・ 帰化種：45 種
- ・ 帰化率：36.0%
- ・ 特定外来生物：2 種 オオフサモ、ミズヒマワリ

源流の七福橋から緑橋までの範囲を調査ルートとした。源流部に木道で水辺に近づくことのできる親水施設が作られ、水生植物が植栽されている。しかし、調査対象地はコンクリートの三面張り護岸で土砂の溜まった部分に植物が生育している状態であった。

特定外来生物であるオオフサモとミズヒマワリを確認した。大泉井頭公園周辺にオオフサモ、井頭橋周辺から緑橋周辺にかけてミズヒマワリの繁茂が見られた。

重要種は、5 種と比較的多く、水辺に生育する種を確認している。イネ科ドジョウツナギ属の一種を確認したが、結実が確認できなかったため、種の同定に至らなかった。重要種のムツオレグサ（都 VU）である可能性もある。

特定外来生物が重要種を被圧してしまう状況も起こっており、今後、外来種の駆除などの対策が必要になると考えられる。

調査地外

区立武蔵関公園に隣接する西武新宿線の法面に調査地での確認がなかったコウヤワラビが生育していたため、確認種のリストに加えた（資料－3）。

7) 環境類型ごとの植生

植物相、植生調査結果をもとに、調査地選定時の環境区分（第Ⅲ章 表Ⅲ－1－1 参照）を再区分し、環境類型ごとの植生についてまとめた。植生情報を動物の生息情報を整理し、把握する上での基礎データとし、今後の保全、管理方針の策定などに役立てるための整理である。

樹林地の区分には管理作業頻度、林内の明るさ、人の利用頻度（踏圧）、林床の植被率の4項目を評価し、表Ⅳ－1－12のように整理した。その結果、落葉樹優勢林は規模と管理状況により大規模樹林（保護区型）、大規模樹林（都市公園型）、小規模落葉広葉樹林の3つの型に区分された。廣徳寺の樹林は針葉樹林の規模が大きかったため、社寺林に含めた。ルート調査地については、河川を水辺（流水域）、その他の調査地を市街地に区分した。調査地全体を環境類型に分け、その特徴を表Ⅳ－1－13にまとめた。

第Ⅵ章では、この環境類型にさらに動物調査結果を加え、環境類型とそこに生息・生育する動植物の特徴をまとめた。さらに第Ⅶ章では、それぞれの類型ごとの管理・保全方針の提案をまとめた。

表Ⅳ－1－12 樹林地の類型化と特徴

類型	管理作業頻度	林内の明るさ	人の利用頻度 (踏圧)	林床の植被率
大規模樹林(保護区型)	△～○	△～○	△	◎
大規模樹林(都市公園型)	◎	○	◎	△
小規模落葉広葉樹林	○	○	△～○	○～◎
社寺林	○	△	○～◎	△～○
屋敷林	△～○	△	○	△

※評価項目の程度・頻度が高い◎、中程度○、低い△

表IV-1-13 環境類型ごとの植生の特徴

類型	モデルとなる場所	特徴
大規模樹林 (保護区型)	都立光が丘公園 都立石神井公園 稲荷山・清水山憩いの森 豊島園	定期的に管理作業がされ、保護区域として立ち入り制限がされている場所が多い。管理の頻度により亜高木層、低木層があまり無い林床の明るい林から、これらの層が発達した比較的林床が暗い林までがある。林内は踏圧が低く、植被率が高い。動植物相が豊かな樹林。
大規模樹林 (都市公園型)	都立城北中央公園 都立大泉中央公園 区立武蔵関公園 武蔵学園	人の利用が優先されている樹林で、植栽由来の樹木が多い。亜高木層、低木層があまり無い林床が明るい林。林床は踏圧が高く、草刈り頻度も高く、植被率が低い。動植物相は保護区域を設けている大規模樹林よりは貧弱になっている。
小規模 落葉広葉樹林	どんぐり山憩いの森 区立高稲荷公園 東京カトリック神学院 八の釜憩いの森	高木層にクヌギ、コナラ、イヌシデなどが優占する。亜高木層、低木層があまり無い林床が明るい林。林床の踏圧は比較的低く、アズマネザサなどが生育している。
社寺林	八幡神社 氷川神社 天祖若宮八幡宮 土支田八幡宮 廣徳寺	ヒノキ、シラカシ等の植栽由来の林。高木層が常緑であるため、林床は暗く、被度が低い。シュロなどの鳥類が運んだ種子由来の植物が林床に生育している。
屋敷林	U氏邸 N氏邸 MO氏邸 MU氏邸	敷地境界にケヤキが植えられており、ケヤキの大木も多い。高木～亜高木層にシラカシ、亜高木～低木層にヒサカキも生育している。木陰のある樹林地と玄関先などの明るい開けた環境が両方存在する。
草地	都立光が丘公園昆虫原っぱ 都立城北中央公園草地 小作原広場 井頭こぶし憩いの森 区立びくに公園	低茎から高茎の草地。草刈り頻度により、草丈が異なる。区内では公園などにある踏圧の高い低茎草地が多い。中茎から高茎の草地は区内では少ない。
農地	高松市民農園 石泉愛らんど O氏畑	植物は農作物が中心で植物の自生種は少ないがスベリヒユ、コニシキソウ、ハキダメギクなどが見られた。
水辺 (止水域)	都立光が丘公園BS 都立石神井公園石神井池 都立石神井公園三宝寺池 区立武蔵関公園富士見池	林縁から草地、湿生植物帯、抽水植物帯、浮葉植物帯と、止水域をとりまくエコトーンが形成されている。
水辺 (流水域)	石神井川流域 白子川流域	河川の淵から瀬、抽水植物帯、湿生植物帯、草地と幅は狭いがエコトーンを形成する環境であった。
市街地	田柄川緑道ルート 城南住宅ルート 練馬駅周辺ルート 立野町ルート 土支田・谷原ルート	市街化が進んだ地域、緑化が進められている地域、緑が多く残る地域などがある。路傍、木陰、干川上水沿い、畑地、公園の草地など、それぞれの環境に適応した様々な植物が見られた。

8) 練馬区の植生の主な特徴 ()内は参照章番号(第IV章以外)

①潜在自然植生は、シラカシ群集である。(第II章5)

区内の樹林の現在の潜在自然植生は、シラカシ群集である(奥富ほか(1987))。

②樹木地は増加しているが、雑草地は減少している。(第II章6)

「練馬区みどりの実態調査報告書 平成19年3月」によると、樹木地は増加傾向にあるが、雑草地は減少している。

③植栽種が多い。

本調査では、全確認種数1,093種中、植栽種は387種であった。これは全体の35%にあたる。

また、産地不明の在来種の植栽も多く、重要種とされる植物の植栽も多い。植栽する場合には地域の遺伝子を保護するために、なるべく近くの産地からとし、植栽記録を残していく方法が望ましい。

④大規模樹林や水辺に重要種が多い。

調査地点ごとの重要種の確認は、都立石神井公園三宝寺池で9種と最も多く、次いで都立石神井公園(その他)(9種)、落葉広葉樹の二次林のある清水山憩いの森(8種)、稲荷山憩いの森(5種)、河川では白子川流域(5種)となった。規模が大きく踏圧があまりかからない樹林や三宝寺池のような止水域、白子川のような流水域で重要種が多いことが分かった。

上記のような要件を備えた樹林と水辺のある都立石神井公園全体では、27種もの重要種を確認し、全調査地の中で最多の確認となった。

⑤河川で分布範囲の広い特定外来生物が見られた。

4科6種の特定外来生物を確認した。分布範囲の広いものとして、石神井川のオオカワヂシャ、白子川のみズヒマワリが挙げられた。

⑥帰化率は、樹林地で低く、草地、農地、ルート調査地で高い傾向にあった。

帰化率は、23.2%であった。区内の帰化率は樹林地(屋敷林、社寺林を含む平均12.2%)で低い傾向にあり、草地(平均28.1%)、農地(平均33.3%)、ルート調査地(31.3%)で高い傾向にあった。この結果は、帰化植物が人為的な攪乱が行われる場所に多く生育することを反映している。

⑦市街地などに見られる植物が多い。

出現頻度の高い植物として、路傍、人家の庭、公園など、市街化された場所で見られる在来種(ドクダミ、オニタビラコ、カタバミなど)または帰化種(ハルジオン、ハキダメギク、セイヨウタンポポなど)、鳥類により種子散布される木本類(エノキ、トウネズミモチ、シユロなど)、よく植えられる木本類(サツキ、ソメイヨシノ、シラカシなど)が抽出された。

⑧雑木林、草地、湿地などに見られる植物が少ない。

出現頻度の低い植物として、樹林生のシダ植物(クマワラビ、ヤワラシダ、ヤマイタチシダなど)、落葉広葉樹の二次林(雑木林)の植物(トネアザミ、シラヤマギク、ヤマユリな

ど)、草地生の植物（ナンバンギセル、ノアザミ、トダシバなど）、湿生植物（オニスゲ、コアゼガヤツリ、カワラスガナなど）、かつて水田の畦に生育していた植物（コオニタビラコ、ノミノフスマ、カントウヨメナ）、土壌の露出した路傍などに見られる植物（ユウガギク、ミチヤナギ、ノミノツヅリなど）が少ないことが分かった。

⑨柵で保護されていない樹林は踏圧が高く、林床の植生があまり発達していない。

公園や憩いの森などの人が自由に出入りできる樹林は踏圧が高く、林床にあまり植物が見られなかった。また、そのような人がよく利用する樹林では、踏圧だけでなく、草刈りの頻度も高く、林床に植物があまり生育できない原因となっていた。

⑩草地は、シバ草地、踏圧の高い低茎草地が多く見られた。

区内で最も身近に見られる草地は、公園などのシバ草地で、次いで同様に公園などにある踏圧の高い低茎草地であった。中茎～高茎草地は、意図的に草刈りを制限している都立光が丘公園の昆虫原っぱ、同バードサンクチュアリ、小作原広場、井頭こぶし憩いの森のような場所に限られた。

⑪植物調査により抽出した着目すべき環境

重要種の多く生育する環境と出現頻度の低い植物の生育環境をまとめると以下のような環境が抽出され、区内の植物を保全するに当たって着目すべき環境といえる。

- ・ 林床の湿り気を維持できる規模の樹林
- ・ 踏圧の高くない林床を持つ適切な管理がされた落葉広葉樹の二次林
- ・ ある程度の規模を持つ踏圧の高くない低茎から高茎の草地
- ・ 水生植物、湿生植物が生育できる河川
- ・ 水生植物、湿生植物の生育できる水辺や湿り気のある草地
- ・ 土壌の露出している路傍